ひとごろしって、チョーおもしれェ！

花見月陽虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひとごろしって、チョーおもしれェ！

【Ｎコード】
Ｎ６１４１Ｗ

【作者名】
花見月陽虎

【あらすじ】
子供の頃、蟻の行列を踏み荒らしたことはないか？
ゲロゲロうるさいカエルに石を投げつけたことはないか？
小鳥をエアガンで撃ったことはないか？
俺はある。
それは全部、男なら子供の頃にやってるような『やんちゃ』なイタズラだ。

しかし俺はそんな『やんちゃ』では済まないことをやってしまった。

つまり端的に言うと、俺は人を殺したんだ。

別に恨みがあったわけじゃない。会話をしたわけでもない。顔すら見たことはない。何の接点もないやつだ。ただそいつは、殺しやすい位置に、殺しやすい形で立っていた。

だから俺は背中を押した。

そいつは死んだ。

そしてその日から、俺は虫でも殺すような気軽さで殺人を開始したんだ。

これはゲームなんてもんじゃない。

ただのひまつぶしさ。

やった！

やった！
やった。やったやったやったやったやったやったやったやったヤッタヤッタヤッタヤッタ。
ついに殺っちまった。
俺が人を殺した。
特に理由はない。
……ないんだ、本当に。

田舎ながらも頑張って観光用にと整備した霞ヶ原公園。
やってくるのは近くに住む老人や家族連ればかりで、結局役立たずだった不毛な場所だ。
あいつは、あの老人は海を見渡せる崖の上にいた。手すりに身を寄せて海を眺めていた。
それだけだ。ただそれだけ。
恨みはない。接点もない。会話をしたことも、顔を見たこともない。
ただ、そこに背中があった。
人を殺してみたら、どうなるだろう。
悪いことだと知っていても、誰もが一度は考えてしまうことだ。
押してくれとせがむような老人の背中を見たとき、俺は思わず周囲を見廻していた。

――――誰もいない。

あの老いた男の丸まった背中が、俺の目の前にあるだけだ。
そこは朝日が綺麗に眺められると有名な場所で、夕陽は俺の後ろから差していた。切り立った崖の上に、ちょうど人間の腰くらいの

高さがある木製の柵が設置されている。同じく木で作られたベンチも置かれていて、たまに誰かが座っているのを見かけたりする。
俺は引き寄せられるようにして、忍び足で男の後ろへと近づいていった。
ザシ……ザシ……
踏みつけられた雑草が葉擦れして警告音を響かせる。
それはごく僅かで風音に掻き消されるほどの小ささだったが、俺の耳には確かに届いていた。緊張で心臓は太鼓を打つように高鳴り、血管はパンパンに腫れ上がって破裂寸前。頭がくらくらし、俺は全身から血を噴き出して倒れるのではないかと意味不明な心配を抱いたほどだった。
やがて地面が石畳に代わった頃、老人の背中はいよいよ巨大化し、俺の両腕を押しとどめるほどの障壁になったかと思うと、いきなりしぼんで小さくなった。
幻影。
全てはまぼろし。
人を殺すのが怖い？
常識に縛られた俺の意識が見せた蜃気楼だ。
今は何が見える？
何を感じている？
何を覚えた？
好奇心だ！
この永く生きた男の背中……どんな人生を過ごしてこんなに歪んでしまったんだ？
誰でも初めは赤ん坊だった。成長して生意気なガキになり、学校で暴れ、友人を作り、恋人と出会い、結婚し、あるいは別れ、子供が生まれ、その子供から孫が生まれ、人生の酸いも甘いも経験したことだろう。
殺そう。
こいつを殺そう。

突き落とすんだ。
背中を押す。肩を押す。それだけでいい。
ここの柵は低い。老人の足腰は弱い。
腕を上げるんだ。両手をやつの背中に向けろ。
押せっ……押せっ……押せっ……押せっ……。
近づけ……もっと近づけ……もっと……もっとだ。
靴が地面を踏みつけるたび、微かな音が俺を焦らせる。完全な無音とはいかない。だがその現実こそが、俺を更に興奮させる。
いま俺を支配しているのは、人殺しへの興味。殺害の醍醐味。殺人の素晴らしさ。期待。非日常の渇望……！！
なんだこの気持ちは。なんだこの感情は。
面白い。ああ面白い。変わる。変わっている。
こいつを殺せば、こいつが崖から突き落とせば、何もかも全てが変化する。
灰色の日常は終わりだ。色付いた景色がいま目の前に現れている。
これを得たい……支配したい。交わりたい、最高の快感に浸りたい。
欲望だ、これは。
救いようのない欲望。
それが俺の精神を蝕んでいる。いや、蝕ませている。俺の意志で。
本能から求めているのだ。殺しを。命の略奪を。安寧の唾棄を。
あと何メートルだ？
違う。あと何歩だ？
これも違う。あと半歩。それから腕を伸ばすだけ……。
やれる。
やれるやれるやれるやれるやれるやれるやれるやれる！
やるんだ。おれにはできる。できないはずがない。破裂しそうな心臓の鼓動は未来への期待じゃなかったのか？
恐怖なんてもう消し飛んだ。殺せる。いまなら殺せる。
足を前に踏み出せ。腕を前に突き出せ。

何が聞こえる？　俺の鼓動だけじゃない。俺の呼吸だけじゃない。この老人の吐息だ。生きている男の肉体だ。魂だ。熱さだ。なにもかも全てだ。

後ろからよく見れば無数の白髪と灰色の髪。皺が目立つ首筋は人生の深みの証明。セーターを着ている洋服のセンスはさすが老人といったところか。

　小便臭い。

実際に臭うのではない。ただ自分の記憶にある死んだ祖父と祖母の香りが蘇ってきている。

殺せるか？　自分の祖父を殺せるか？　家族を殺せるか？

やれるか？　突き落とせるか？　命を奪えるか？

昔の俺なら無理だった。ダメだった。行動できなかった。勇気がなかった。決断できなかった。だが今の俺ならどうだ？　捨て去るべきは変化なき日常。獲得すべきは快楽のるつぼ、永遠の変化。すべては俺のものになる。すべての支配者に俺はなれる。なるんだ。

殺れっ……殺れっ……殺せっ……殺せっ……突き落とせ……人生から脱落させてやれ！

　さぁ、早くッ！

――――――――――――――――

――――――――――――――――

――――――やった。

押した。

背中を押した。

声も聞こえた。

ヒャッ――――。

それだけ。それで消えた。

落ちたか？　死んだか？　崖下を覗き込め！

いやダメだ。その前に周りを確認するんだ。

いるか？　俺を見たやつが。
あの老人には見られなかった。
後ろに続く石畳の道にも人影はない。
鳥の鳴き声が聞こえる。
風の音が聞こえる。
草花がざわめき、俺の殺しを誰かに訴えているかのようだ。
だが人の声は聞こえない。人間の姿はない。
バレていない。見つかっていない。
やったんだ。俺は完全犯罪をやり遂げた――――
――――本当に？
夕暮れと細波の素晴らしい景色が見える柵の向こうに、あの老人は落ちてしまった。消えてしまった。
確認するんだ。本当に死んだのか。
自分の体が震えている気がする。
怖いのか……いや違う。これは興味だ。興奮だ。喜びだ。
心臓は悲鳴をあげているのではない。歓喜の歌を独唱しているのだ。
感情の空は曇ってなどいない。どこまでも澄んで晴れ渡っている。
なんと素晴らしいことか！
俺はゆっくりと、半身を柵の向こうへと乗り出す。遠くの海は近く見えるのに、見下ろした近くの海は遠く見える。
死ぬ。この高さは確実に死ぬ。命を失う。体はぐちゃぐちゃに裂ける。岩肌が見えた。海の水がぶつかり白波となり、泡だって飛沫を吹き上げている。
……見えた！
地味な色合いのセーターが、ズボンが、血に染まり変色している。四肢の全てはぴくりとも動かない。うつぶせに倒れたままだ。
頭蓋が割れてはじけたのだろうか。周りにピンク色をした？何か？が散らばっている。岩を乗り越えた波がそれを持ち運び、海の胎内に取り込んだ。体の血も洗われて薄まり、満ち潮が遺体を弄んで

いる。
やつは死んだ。
殺した？　ああ、殺した。
俺が殺した。
じっと手を見る。この掌が人を殺した。抹殺した。地獄に送った。

ああ、ヤバい……。
やっちまった。ついにやっちまった。
逃げろ、逃げろ、逃げろ、逃げろ、逃げるんだッ！
早くこの場を離れろッ、俺。何をやっているんだバカッ！
足を動かせ！　逃げろ！
逃げろ逃げろ逃げろ逃げろにげろにげろにげろニゲロニゲロニゲロオオオォォォオッッ！！！
動いた。動いた動いた、やっと動いた。俺の脚。大腿四頭筋。腓腹筋。下腿三頭筋。長指伸筋。それまで言うことを聞かなかったこいつらが、いまや俺の命令に忠実な犬となっている。
俺はこの公園までどうやって来た？
思い出せ。思い出せ。
――そうだ自転車だ。親に買って貰った電気自転車。
ここは緩やかな丘陵になっている。自宅までは全て下り道。
一五分。いや一〇分だ。急げば一〇分で家に帰れる。
だが待て、最近通っていない脇道もなかったか？
ダメだ！　小学生の頃に使ったきり記憶にない！
くそったれが。考えるだけ時間のムダだ。
とにかく行けッ、走れッ、俺の家まで、早く走り抜けるんだッ！

いかれたサイコパス野郎　それが、俺？

それからどれくらい走り、どれくらい進んだかわからない。距離の計算もしなかったし、誰かに見られなかったかという注意もしなかった。

ただペダルを漕いだ。いつも通りの道を、やみくもに駆けた。

俺が再び脳を活性化させたのは、玄関先に自転車を乗り捨てたときだ。息は切れ切れ。荒れた呼吸を整えるために両膝へ手をつかなければならないほどだった。

家の周りはもう闇の中。路上には電灯もついている。だが暗い。とてつもなく暗い。

俺の姿なんて誰にも見られなかった。その可能性の方が高いだろう。

この辺りは田舎だけあって住宅地ですら高い石垣の上に建っている。老人は朝早いが夜も早い。外を出歩いている奴なんて、あるとすれば塾帰りの中学生くらいだ。

付け加えるなら、この付近に塾などない。中学生のいる家庭もない。高齢化バンザイ！　これほど高齢化に感謝した日はないぞ。少なくとも記憶の中では！

俺は玄関の扉に手を伸ばした。戸の横には表札がある。

『前田』

ありきたりな、どこにでもある名字。

平凡な性を受け継いだ俺は、その名に相応しくない非凡な行いをしてしまった。震えそうなくらい緊張しながら玄関の戸へと手を伸ばす。

「ただいまぁ」

「あっ、お兄ちゃん。おかえりー。おそかったねぇ」

「あぁ……」

妹だ。

所作を慎重にこなし喉も限界まで絞ったのに、耳聡く全部聞きつけて玄関まで出てきやがった。
妹の名はふみか郁佳という。この付近で唯一の中学生だ。そして塾にも通っていない。部活はバレー部に所属しているらしいが、こんなに暗くなるまではやっていない。
一方の俺は、ずっと帰宅部の身だ。高校へは自転車で通っている。今の学校へと進学するなり最新の電気自転車を手に入れたため、坂道だらけの田舎でありながら苦労とは無縁の登下校生活を送らせて貰っている。この点は、親に感謝すべきことだろうが。
妹は髪を後ろに纏めたポニーテール姿で、体は若干太めだ。スポーツをやっているせいだろう。締まりのないブヨブヨの体とは違う。笑いかける目は若干垂れ気味で愛嬌にも富んでいる。しかし俺と同じ顔ではとても可愛いと思えない。
現実の妹など、まぁこんなものだろう。
「今日はどうしたの？」
「別に……ちょっと寄り道しただけだ」
「ふぅん。まぁいいや。もうご飯できてるよ。冷めないうちに早く食べなよ」
妹は陽気な口調でそう言った。
こいつは他人が落ち込んでいてもこの調子なのだ。配慮というものを知らなすぎる。まだガキなのだということを実感させられる瞬間だろうな。
一方の俺は大人か？
人一人をぶっ殺したんだぞ。
もう大人を通り越している。
そうだ、俺は人殺しだ。殺してしまった。どこにでもいるような棺桶に片足突っ込んだ死にかけの老人だが、生きる価値がないわけではない。それを一切の情け容赦なく、ただ楽しそうだから、そんな理由で命を奪った。
俺はまた掌を見た。何か変わったか？　変化したか？　日常は消

滅し、非日常が支配するようになったか？
分からない。感じ取れない。まだ何も。
自分の部屋に通学鞄を置いた俺は、そこでやっと思い出した。あの殺し……、学校帰りの寄り道ついでにやっちまったんだ。
制服姿、肩掛け鞄を持ったまま、殺人を犯して自分の家に帰ってしまった。
まともじゃない。まともじゃない。まともじゃあない！
俺はただの高校生だ。ついさっきまではそうだった。普通の人間の一人だった。だが、今は違う。何かが変わった。何かが……。
ドアがノックされた。
「お兄ちゃん何してるの？　早く晩ご飯食べないと冷めちゃうよ」
「わかってる。すぐにいくよ」
ビビらせやがって。
ドアの向こうから、妹が話しかけてきただけだ。
何の心配もない。
部屋を出た俺は真っ直ぐリビングルームへと赴き、夕食の席についた。目の前では妹がすでに食べ始めており、キッチンからは母親がポテトサラダを持って出てきていた。それがドン、とテーブルに置かれたのを、俺は目で追っていた。
今日のメインはハンバーグだ。本格的な店のように鉄板で焼いているためか、まだジュージューと音を立てている。肉汁と油のダンスによって、俺の胃が餓えた馬のように嘶いた。
目の前でナイフとフォークを器用につかっていた妹が、俺の失態を笑った。俺も釣られて軽く笑う。
日常……。
日常だ、これは。
変わった？　いや、違う。俺は何も変わっちゃいない。周りも何ひとつ変わっていない。すべてはいつもと同じく繰り返されている。
不思議だ。本当に不思議だ。
俺は殺人犯だぞ？　人の命を奪ったんだ。いまごろ刑務所の中で

刑務官からケツの穴をいじりまわされ、囚人から人権無視のいじめを受けていてもおかしくない。そんな存在なんだぞ。その俺が――――日常を謳歌している。

あっていいのだろうか、こんなことが……。

暗い顔をして俯いた俺と違い、妹は呑気なものだ。リモコンを操作し、テレビのチャンネルを変えまくっている。いまは初冬、一一月ということもあって外が暗くなるのは早いが、まだ七時にもなっていない。面白いバラエティ番組すら始まっておらず、見られるのはせいぜいニュースくらい。

ニュース……。

俺は画面を食い入るように見つめた。ちょうどテレビでも、殺人事件の報道がなされている。いつもなら気にも留めない。「またか」とか「酷いことをする奴もいたもんだ」とか、妹が「怖いねぇ～」と話して誰かがそれに同意したり、その程度の話題しか提供しない事件。それが殺人なのだ。

今日の俺は、そんなどうでもいい扱いをされるニュースを聞いて、心の臓が張り裂けそうだった。なんせテレビでは、犯人が逮捕されたとの内容が報じられ、自供内容も簡単だが一部紹介されていたからだ。

キャスターの淡々とした口調で、事件の一部分が語られてゆく。

『犯人として逮捕されたのはむとう武藤はじめ肇容疑者、四二歳。武藤容疑者は「別れ話を切り出され、ついカッとなって刺した。殺すつもりはなかった」と、容疑を認めているとのことです。警察は容疑者を殺人の容疑で起訴する方針で――』

殺人だ。紛れもない殺人。

だが、こいつは俺と同じか？

……違う。決定的な部分が異なる。

ついカッとなって？　誰だってついカッとなることぐらいある。

殺すつもりはなかった？　だが一瞬とはいえ殺意が芽生えなければ殺しなどできまい。

この世には殺したいほど他人を憎んでいる奴なんて幾らでもいる。怒りに染まってしまえば、そいつらだって殺人を犯すこともあるだろう。気持ちや感情という点で、一般人と犯罪者は何も変わらない。だが、俺はどうだ？　俺はついカッとなったわけじゃない。殺したいほどの憎しみを抱え込んでもいなかった。

ただ殺してみたかった。命が潰えるのを見てみたかった。人の死に様に興味があった。

興味本位での殺人――――それはガキが蟻の行列を踏み散らして遊ぶのと同じだ。カエルに石を投げつけるのと同じだ。トンボの羽根をもぎ取るのと同じだ。罪悪感など微塵もない。

いまヤバいことをやってしまったと思っているのは、周囲が殺人をヤバいことだと認定しているからだ。もしいまが戦時中で、殺人が普通のことで、そこで敵兵を殺しただけなら……俺は正常な人間ということになる。

俺は異常者なのか？　それとも正常者なのか？

「ただいまぁ」

「あっ、お父さん。おかえりー」

妹がリビングを出て玄関へと出迎えに向かった。

父さんが帰ってきたんだ。

俺の父親は地方公務員だ。俺の祖父も地方公務員だった。

地元の町に勤める公務員というものは、コネが優先される。親が子に、子が孫に。

これは行政の腐敗した一部分かもしれないが、技術や精神が受け継がれてゆくということでもある。利点と欠点。それは表裏一体のことかもしれない。

今日は頭の硬い父さんと一緒にいられるような気分じゃない。

夕食を素早く胃の中へと掻き込んだ俺は、父さんと二言三言の会話を交わしただけで自室へと退散した。今日はヘンな気分だ。早めに就寝したほうが良いだろう。それに明日になれば、何かが変わっているだろうから。

翌朝。
俺はいつもより早めに起床し、登校の支度を済ませ、家族揃っての朝食を終わらせた。ごく普通に登校し、ごく普通に授業を受けた。
俺は人を殺した。
この学校にいる人々、教師から生徒、校長、用務員に至るまで、その全員が一度として体験したことなどないであろうことを、俺は体験してしまっている。
今日一日感じ続けてきたこの感覚は何だ？
周りにいる連中がみんな小さく見える。
自分だけ一歩先を進んでいるのだ。誰かに話せることではないが、妙な優越感にずっと浸りきりだった。
学校での授業を受け終えた俺はこれまたごく普通に帰宅し、ごく普通に夕食のテーブルへと着いた。異常が始まったのは、その時のことだ。
今日、父さんは珍しく定時上がりだった。表に見える役場の仕事は定時で終わって見えてもなんだかんだで色々な処理をやらされるらしく、大抵は六時過ぎ、酷いと七時を廻って八時くらいになってからやっと帰ってくるほどなのだ。
ご苦労様と言いたいところだが、今日帰ってきたその顔を見て、俺は正直、心底ビビッちまった。
無言でリビングの扉を開いた父さんの顔色は、悪いなんてもんじゃない。もっとずっと黒ずんで見えた。
「あら、あなた……。今日は町役場で何か嫌なことでもあったの？」
「うむ。それなんだがな。十年ほど前に退職した先輩に、野口さんという方がいるんだが、その人が昨日、自殺したらしくてな」
「まぁ、本当なの？」
ドクン……
「野口さんはちょう町の観光名所作りに熱心で、昨日は霞ヶ原公園の調査に出向いていたらしいんだ。どうにかして町の状況を改善することはできないか、いつも真剣に心配してくれていたよ」

「すごい人なのね。その野口さんって」
トクン……
「凄いなんてものじゃない。老後の蓄えがあるなら普通はノンビリと暮らしたいとか思うものだが、野口さんは無償でもいいから町のために頑張りたいと、自分から協力を買って出てくれたんだ。俺にとっちゃ町長なんかよりも頭が上がらない、大先輩って感じなんだよ」
「でも、その人が自殺なさったんでしょう？」
ドクン……
「そうなんだ。霞ヶ原公園の岸壁から、真下の海岸に飛び降りたらしい。いつも公園のことを真剣に考えていた人が、どうしてこんなことになってしまったのか……」
ドクン……
「それじゃあ、お葬式には出席なさるのね？」
ドクン……
「しないわけにはいかないだろう。明日は平日だが臨時の休暇を貰うつもりだ。本当は今日の通夜にも出席したかったんだが、あいにく近親者だけで済ませるつもりだと言われてな」
ドクン……
「あなた、明日のお葬式に持っていく香典は幾らぐらいにするつもり？」
ドクン……
「……おい。まだ夕食時だぞ。そういう話はもうちょっと後にしないか」
ドクン……
「まぁ、それもそうね」
…
……
……

まずい。メシがまったく喉を通らなくなってしまった。
なんて話題だ。
俺が殺したのは、たぶんその野口とかいう爺だろう。父さんと接点があったとはさすがに知らなかった。というより名前どころか顔すら見ていない。目に焼きついているのはあの白髪頭と、セーターを着た後ろ姿だけだ。
よく知りもしない爺を、俺は殺したわけだ。そして俺の殺人行為によって、葬式が行われ、悲しむ人がでて、町の観光事業にも影響が出てしまった。
たった一人の爺を殺しただけで、この影響力……。
!?
なんだ!?
俺は何を考えている。
何を感じている。
いま俺が感じるべきは罪悪感のはずだ。人殺しの犯罪者になった俺は、罪を自白して贖いたい衝動に駆られているはずだ。常識的な人間なら皆そうなっているはずなんだ。それなのに、なんだこれは。
俺は――――楽しんでいる。
快感を覚えている。
わくわくしている。
自分の行動に満ち足りている。
さらなる変化を期待している。

周囲の変化を、心の底から歓迎しているのだ!

俺はキレちまったのか？　脳細胞が死滅しちまったのか？　常識がぶっとんじまったのか？　狂っちまったのか？　それとも何か幻覚でも見えるようになってしまったのか？
これは……ダメだ。

ダメだダメだダメだ！
このままじゃあ、俺は本当にイカれたサイコパス野郎になってしまう。
いや、違う。もうなってしまっているんだ。
だって、もう笑顔を抑えきれそうにない。
笑ってしまいそうになっている。
自殺だって？　自殺ってことになったのか。あのじじい。
俺が殺したのに。俺が手を下したのに。俺が突き落としてやったのに。
ぶちまけられた脳味噌を見た瞬間の、あのゾクゾクくる感覚……！
思い出してしまった……何もかもすべて。そのすべてが脳裏へと鮮明に蘇る。
欲求が――産まれ出てきている。
もっとだ。もっとこの感覚を味わいたい。殺したい。もっと殺して、世界を変化させたい。たった一人死んだだけで、何人が涙を流した？　これが二人になれば二倍。三人になれば三倍の人々が悲しみに暮れることになる。俺がそいつらを絶望させるんだ。俺が変えてやるんだ。俺が――やつらを皆殺しにしてやる。殺して殺して殺して殺してころしてころしてころしてころしてコロシテコロシテコロシテコロシテ……。
「あら、どうしたの？　ふみよし郁佳。今日は食欲ないの？」
「え？　あ、ああ……。そうだね、今日はちょっと……」
「もう、体調が悪いなら悪いって言いなさいよね。残すことになったら勿体ないんだから」
「わかってるよ、母さん。ごめん」
プリプリとした態度で皿を片付ける母親を尻目に、俺は自室へと退散した。
ほんとうに、どうかしてた。今日の俺はちょっとおかしい。しかし考えてみれば俺と妹ふたりに同じ名前を与えた両親も、ある意味ではネジが飛んでいる方だと言えるだろう。

ふみよし郁佳とふみか郁佳。
男の子と女の子どちらが産まれても使える名前だからといって、本当にどちらにも使ってしまうなんて普通は考えないことだ。おかげで何かしらの小包や郵便物が届くときには、漢字の名前だけだとどっち宛てかすらわからないという破目に陥っている。
こうなることは予想できただろうに、両親ともその場の？ノリ？だけで決めてしまったらしい。なんというか、バカだ。端的に言うと。
さて、考えを戻そう。
俺は狂人になってしまったのか、それともまだ常人のままなのか、だ。これは正直言うと、俺自身でもまだよくわかっていない問題だ。
俺は常識人だ。少なくとも基本的な部分はそうだ。それなのに一方ではその場の？ノリ？で人殺しをやってしまってもいる。しかもその殺しを楽しんでいるのだ。
狂っている。だが正常でもある。正常だ。だが狂ってもいる。いったいどっちだ。俺はどちらの側にいる？
くそっ。わからない。
なにも、なにひとつ、どれひとつとして分かっていない。
自分をもっともらしく分析してやることはできるが、それができたからなんだというのだ。やってみて、分析して、どういう傾向があるかわかって、それで何が変わる？　その行為自体では何も変わらない。何も変えられない。
俺はひとごろしによって世界を変えた。それは確実な事実として眼前に横たわっている。
こいつをつついてみるか？　それともスルーして『普通の生活』へと舞い戻るか？　あるいは罪を自白して警察に出頭するのも手だ。今ならまだ比較的軽い罪でも済むだろう。
どうする？　どうすればいい。
まだ判断できない。決定できない。選択できない。踏み切れない。
俺はベッドの上で俯せになると、枕の中に顔をうずめた。ちょっ

とばかり悩んでみたところで、答えは簡単になんて出てこない。とりあえず、もう少しだけ生きてみよう。普通に生活してみよう。まだ俺は選択できる立場にあるんだ。どの道を選ぶか、じっくり考えたって事態は急転などしない。

もう少し。もう少し……。

瞼を閉じたまま再思三考を重ねた俺は、気がつけば深い睡魔に襲われていた。これは夢の世界か現実か。ぼやけてゆく意識の果てに、何か答えがあるのだろうか。

日常

日常は帰ってきた。

長崎の片田舎に住む俺は毎日、電気自転車に跨がって高校へと登校している。

小・中・高と、校舎は常に高台の上にあった。災害対策のためとか避難場所として利用するためとかいう理由だが、田舎で未使用の土地を探したら山の上くらいしかないということもあるだろう。

この高校は町内に唯一存在している公立高校で、町立結ノ浜高等学校という正式名称がある。結ノ浜というのは町名でもあるが、しかし俺はずっとこの名前が嫌いだった。

都市と都市の通過点でしかないことを示す最初の『結』

とってつけたような真ん中のカタカナ『ノ』

そして海に面することを端的に示す『浜』

どれもここが田舎であることをこれでもかというほど主張している。

総人口は一万に届かず、近隣の市から経済的恩恵をなんとか受けているだけの腐りかけた町だ。

俺が通っている結ノ浜高校はバブル時代の初期に建てられたお陰で当初は立派な建物だったらしいが、四半世紀の時を経た現在ではくすんだ染みだらけの姿を晒している状態だ。角張った外観はこれでもかというほど昭和を感じさせる。

屋上の貯水槽は外から見てもかなり汚れていて、死体が浮いているだの鳥の糞が溜まっているだの想像したくもない噂が度々聞こえてきていた。

校舎はU字型をしていて意外にも広々としているのだが、生徒数の減少が進んだためか未使用の薄暗い場所も増えてきた。三階建ての建物は、全校生徒が三百人に満たなくなった今では少し大きすぎ、そのせいで発生した空き教室や空きトイレが不良たちのたまり場と

して活用されている。
生徒の減少はそこで働く教員の減少を招き、数えるほどしかいない教師は校舎の見回りをやる暇などなく、当然のように不良たちは世の春を謳歌する。それが偏差値の低下を招き、隣の市からはバカが行く高校と揶揄されるくらい落ちこぼれが増加する。まさに最悪の循環だ。
生徒は小・中と結ノ浜で過ごした連中と隣市の落ちこぼれが上手くブレンドされ、田舎らしい嫌な腐臭が醸し出されている。
俺がここへやってきたのは、高校卒業後、そのまま親と先輩の伝手を頼って公務員として働く予定だったからだ。つまるところ、これは小学生からの人間関係が一生続くことを意味している。
そんな未来、想像したくもない。
三年の教室は、一七歳や一八歳が所属しているとは思えないくらい騒がしく、朝から耳栓を欲したくなるほどだ。
俺は挨拶もなく自分の席についたが、馴染みのクラスメイトは俺の近づくなオーラにすら気づかず机の間を縫ってやってくる。
「お、前田くん。おはよーさん」
「なんだ、会長か」
「会長か、はないだろ。まったく。ちゃんと名前で呼んでくれないと」
無神経にズカズカと話しかけてきたのは、生徒会長のいさはや伊佐早さねよし眞良。
彼の血筋は伝統ある家系に属し、そのため名前も古風になっている。昔からの優等生だが、典型的な井の中の蛙だ。田舎以外のことは何も知らない。
来年、高校を卒業してから県外の大学へと進学する予定の男。
この学校では飛び抜けた頭脳の持ち主だ。それが都会に出て役立つかどうかは知らないが、経営学について学んだ後は、またUターンして実家の家業を継ぐ予定となっている。
はっきり言って、羨ましい境遇だ。

伊佐早家はこの結ノ浜町を中心とした一帯に広大な土地を所有しており、不動産業に加えて土地に付随する様々な事業までを手がけている。
たぶん、というか確実に結ノ浜トップの富豪だろう。
辛うじて公務員にだけ人脈を持っている俺とは大違いだが、その俺ですらこの町では勝ち組に属するのだから、経済の落ち込み具合たるや半端なものではない。底辺連中が不良になって暴れたくなるのもわかる気がするくらいさ。
「それで、朝っぱらから話しかけてくるからには何か用があるんだろ？」
「用事がなきゃ話しかけちゃいけないっての？」
「いや、べつにそんなわけじゃないんだが……」
「まぁいいや。あ、そうそう。例の噂は聞いたかい？」
「例の噂？」
「この町で自殺者が出たって話だよ」
「なんだそれか」
「すごいよねー。自殺だよ自殺。こんなへんぴな田舎で自殺とか、目立ちすぎて逆に無理だよ。死んじゃったら世の中のことを何一つ楽しめなくなるっていうのに、バカだねぇ～～～」
『バカはてめぇだこのボンボン野郎！』
という台詞を飲み込んで俺が耐えられたのは、誰にでもフレンドリーに接する本物のあほう阿呆が寄ってきたからだ。
「お、おおおおお、おはよう」
会長が上半身をクイッと動かして、斜め下から覗き込むように相手を見やる。たったそれだけの所作で、俺には会長の興味が他に移ったということが理解できた。
幼稚園の頃からの付き合いだ。ちょっとした癖ひとつで全部わかってしまう。それは相手にとっても同じことだが。
「おはよう。ふたちよ双智与くん」
会長から声をかけられて喜んでいるこいつは『さぬま砂沼ふたち

よ双智与』通称、ふとっちょ。
あだ名の由来はその図体のデカさと本名の語感から来ている。
ふとっちょは、その名のとおりかなりのおデブなのである。名は体を表すとはよく言ったものだが、こいつの場合は動きがのろまな上、知的障害と吃音まである。年中スポーツ刈りなせいで体が大きいだけの小学生にしか見えない。
ここまで日本語が酷い状態なのになぜ養護学校に行かないかというと、手頃な場所、つまり町内に通える学校がないことが一番の理由であるということだった。
ただし、それは親の都合であって本人は少々違うようだ。
高校入学早々、不良連中にからかわれていたふとっちょのことを不純に思った俺は、一つ質問したことがある。
「お前さ。いつもバカにされてるけど、この学校にいて幸せなのか？　もし嫌だったら、俺が相談に乗ってやるぞ。先生に話を通して養護学校に転校させて貰っってもいい。市の学校はちょっと遠いけど、ここに居続けるよりはずっとマシだと思うしさ」
答えは意外なものだった。
「おおおおお、おれ、おれ。こっ、この学校、好き。だから、てっ、転校、いい。しなくて、い、いいいいいいいいいいいいいいいる。い、いたい。ずっと、みんなとい、いい、いいいっしょに」
「ホントか？　脅されているんじゃないだろうな」
「ち、ち、ちち、ちが、ちがう。ほ、ほほほほんと。ほんと」
「……そうか。お前が大丈夫なら、おれはそれでいいんだけどさ」
みんなに弄られながら笑って許し、これが良いのだと言って離れたがらない。
ふとっちょはこの学校で一番のバカだが、心の綺麗さでは、多分だれにも負けないだろう。
しかしふとっちょと会話するのは本当に疲れる。一般にはどもりとか吃音症とか言うらしいが、言っていることが上手く把握できないのでは、会話しようにも成り立たせるのが難しいのだ。

だから俺は、どちらかというとふとっちょを避けている。しかし目が合ったりすると、こいつは喜んで俺に近づいてくるのだ。
そして話す。沢山話す。
何を話しているか判別がつかないことはしょっちゅうだが、うんうんと頷いていればふとっちょは満足し、そしてずっと一人で話し続けるのだ。なんというか、人を騙し続けているようであまり気分が良いものじゃない。
殺人を行っておいて、その一方でふとっちょに罪悪感が湧いてしまうのは、本当に矛盾している。
正直、自分でも自分の心がわからない。
思春期だからとかそういうレベルの話を超越している。なんたってこれは？殺人鬼の心理？なのだから。
ふとっちょは朝一で会話できたことに満足したのか、別のターゲットを見つけてそいつの方へと去って行った。最初に俺へと話しかけてきた会長も、いまは別の連中の馬鹿話に華を咲かせている。
俺は孤独だ。だが机に突っ伏して寝たふりを続けている陰鬱とした奴とは違う。受け身で、それとない姿勢で物事をやり過ごすことに長けた、言わば典型的な普通人間。それが俺なのだ。
クラスメイトはいるが、休日に遊ぶ予定を立てるような？友達？はいない。
このまま大人になってしまったら、もっとつまらない日々を送ることになるだろう。年上や年下ばかりの世界では、どう足掻いたところで仕事の延長という関係以上は築けないのだから。
唐突に、教壇脇の戸が開いた。
そこに現れた姿を見て喧噪がぴたりと止む。
「うーっす。ホームルームはじめるぞ。みんな席につけよ～」
平静な日々が、また繰り返されようとしている。

これで二人目だッッッ！！

起きる。
←
顔を洗う。
←
着替える。
←
朝食をとる。
←
登校する。
←
授業を受ける。
←
昼食を食べる。
←
昼休みを過ごす。
←
また授業を受ける。
←
掃除。
←
下校。
←
着替え。
←
夕食。
←
風呂。

←
就寝。
←
起きる。
←
朝食。
←
←
←
←

繰り返しだ。
俺にとって、日々はただの繰り返し。永遠の反復。堂々巡り一進一退生産消費再生産。
これに何の刺激がある？　何の面白みがある？
何もない。
？無？だ。

仏教の開祖、ゴータマ・シッダールタは、世の全てを？縁起？だと述べた。
食って寝て排泄して、排泄物から実ったものをまた食って寝て排泄して、そういう循環で世の中は構成されているらしい。
人間の生活も同じだ。
古代から現代まで、変わった部分は数多い。しかし絶対に変わらない部分というものもある。俺はその？変わらない部分？が、だいっきらいなんだ。
霞ヶ原公園の断崖から野口さんとやらを突き落として一週間。
世界は大いに変化したように見えて、その実なにも変わってなどいない。世の中は通常通りに運行し、一人の老人の自殺などすぐに忘れ去られてしまった。俺の優越感も今や消え去り、後には何も残っていない。

一人の老人が死んだだけ。それだけ。
……それだけ？
そうだ。その通り。
残念ながら、世界は冷淡なのだ。一人の老人の死に構っていられるほど、暇を持て余しているわけじゃない。
通夜をし、葬式をし、納骨し、それで終わり。処理は以上で完了する。
ある程度の礼節を維持しつつ効率的に・・ことを進める。これもまた、日本人の偉大なる発明品なのだろう。
忘れられる――――。それは最高につまらないことだ。

＞i３３０９９―３９２２＜

ただ、つまらない。
帰宅途中、俺が乗った電気自転車は、その向きを霞ヶ原公園へと向けた。
もう限界だ、もう限界。耐えられない。耐えられそうにない。この日常に。この世界に。
俺は知ったんだ。
あの味を……。
あの興奮を……。
あの悦びを……。

あれほどまでに楽しく、世界が輝いて見えたことはこれまでなかった。古い時代と価値観が消失し、新たな価値観が創造された。俺の内側だけのことかもしれないが、世界は確かに変化して感じられたんだ。
俺は殺さなくちゃあならない。そうでなければ、あの素晴らしい体験は二度と味わえないのだ。
断崖の上を隠れながら見渡せる、そんなポイントがある。背の高

い雑草に覆われた丘陵が、老人を突き落とした展望地点近くに存在しているのだ。そこでうつぶせになれば、全身が隠れてしまう。
誰にも見つからず、誰かを殺し、そして速やかに戻る。周囲にいる人間を確認し、機会を見計らって逃亡する。簡単なことだ。手順さえ間違わなければ、実に単純、かつ明快にすべてを終わらせることができる。
俺は展望台付近にある公衆トイレの裏に自転車を隠すと、雑草が生い茂った緩やかな丘陵に身を隠した。ここはラクダの背中のようにうねっている地形のため、窪んだ部分に身を隠せばどの方角から見られていようとも絶対に見つからないのだ。
大丈夫。見えない。バレない。だれにも。

だが……
……
……
……静かだ。

こうして丘陵に伏せてみると、今まで聞こえもしなかった音が耳に入ってくる。雀の鳴き声は分かり易いが、それに混じって鳴いているのは何だろう。？キキキッ？とか？グエッ？とか？ギャーッ？とか、必ずしも綺麗ではない声、奇声としか表現しようのないものが空のオーケストラを邪魔しているのだ。
他のものは、もうちょっとわかり易い。
例えば草花。
風が来れば、野原や森の自然が動いて教えてくれる。遠くから順に揺れ動き、葉擦れの合唱をこの丘まで運ぶのである。お陰で風向きまで容易に観測できるし、どこからどこまでの範囲に音が届くかも直感で把握できる。
霞ヶ原公園は、そこそこ広い。だがその広さを感じさせない狭さがある。原因は山と人工林だ。

この公園は海に面しているが、この辺りの海は山のすぐ近くにあるためいきなり深くなっている。遊泳には向かず、その上海岸は岩肌が露出している。歩いて近づくのも躊躇われるくらいだが、しかし切り立った崖と、その上から見渡す水平線は絶景そのものだ。

たしかに、旅行で風景を楽しむのには良かろう。町が観光に力を入れる理由もよくわかる。だが山だらけの田舎など、住むには適さない。若者は次々と脱出し、老人は増加の一途を辿っている。目立った産業もない。

田舎らしい漁業を見てみよう。漁獲量はごく平凡。入り江は深度こそあるものの、細く入り組んだ地形のせいで大型船は使えない。メインはもっぱら個人の漁師だ。俺も小型漁船以外目撃した記憶がない。

農業はどうかな？

山のせいで無理矢理切り開いた段々畑以外に利用できるものがなく、平地が少ないため田舎にありがちなだだっぴろい田園風景もこぢんまりとしたものにおさまっている。農家もやはり個人がメインでそこそこの広さの農地を各人がバラバラに所有しているためか、大抵はギリギリの収益で生活しているようだ。

なんともまぁ、終わっているな。

しかしこの進行し続ける過疎化の恩恵で、俺は安心して？殺し？に専念できるわけだ。

さて、始めようか。

霞ヶ原の断崖は朝日が拝める東側に面している。この崖上にある屋外展望台へ辿り着くルートは二つ。

一つは南側の斜面から蛇のようにまがりくねった道を登ってくるルートで、周辺には花畑や桜並木が続いている。

今は冬だ。

サクラは咲いていないが、椿や山茶花なども所々に混ざっているため、寒い時期でも彩りは欠いていない。花畑も同じく、冬の花々に植え替えられているため、風は肌を刺す冷たさでありながらここ

だけ妙に温和な雰囲気だ。
このルートは今いる丘陵地帯からなら全域を眺望することができるので、どこに人間がいるか一目でわかる。
二つ目のルートは人工林の中を通り抜けるコースだ。
細い上に生活道とは繋がっていないため、意図して通ろうと思わない限り誰も通らない。
しかし全方位を林に囲まれた道は、誰かが通っていても察知できないし、そこからの足音や話し声すら聞こえない。逆に言えばこちら側の声も向こうには届かないということでもあるのだが、それはあまり利点とは言えないだろう。
林は静かだ。南側の舗装された道ですら誰も通っていない。
今の時刻は……。
携帯を開いてみる。
『１６：４７』。
暮れは近い。
なのに人は来ない。
これでは……
もうだめかもしれない。
日が沈み、一帯が暗くなれば、こんな公園なんて無人となることは明白なのだ。帰るしかない。しかし俺は？今日？殺したいのだ。
かならず？今日？殺す。でなければ、俺は悶々としたまま明日を迎えることになろう。つまらない日常を繰り返すことになる。彩りを失い、白黒になった世界を生きてゆくことになるのだ。そんなの、耐えられない。
…
……
……
耐えられない。耐えられるはずがない。

俺の内なる声が命じている。
?殺せ！　殺せ！　殺せ！?と。
殺すんだ。やめてはならない。続けるんだ。
変えられる。世界は変えられる。
さぁ、来るんだ。俺の獲物。こい。早くこい。
俺が殺してやる。
俺が世間を騒がせてやる。
俺が日常に満足している低能どもに衝撃を与えてやる。
人間がどれほど脆いか、俺が証明してやろう。
俺が――――なんだ？
林から鳥たちが飛び上がった。
木々がざわめき、暴れている。
風のせいじゃない。俺にはわかる。
俺は伏せていた。自然に耳を傾けていた。だからわかる。
これは異常だ。異常事態だ。
――くる、何かが。何者かがやってくる。
林道を歩いている。
誰だ。誰？
見えるか。雑草の隙間から。
何かうごいた。
あれは、人か？
動物ではない。
紫の衣。洋服？
違う。和服だ。
お婆さんだ。
背筋がピンとはった体躯を深みのある紫の和服で包み、白い大きな帯を腰に巻いている。頭髪は染め上げているのか黒いが、遠くからでも分かるくらい皺が刻まれた顔は老齢を隠せない。同じ深紫の色合いで染まった手提げ鞄をちょこんと前に下げ、ゆったりとした上品な足取りで展望台へと向かってきている。

夕刻の散歩というのは、珍しいものではない。暇を持て余している老人は特に多く、町中で動きまわっている姿をよく目にする。

北側の林道は、南側の道からぐるっと廻って通らなければならなくなっている。その途中には様々な種類の樹が植えられていて、春や夏であればそれらが花や実をつけているのを歩きながら見物することができるようになっている。しかし残念ながら、いまの季節は冬だ。あえてそちらの道を通ろうという者は少ない。ウォーキングなどの軽い運動目的であれば別だが。

服装と歩き方からして、目の前に出てきたこの老人はどこかの富豪なのだろう。

金持ちは見栄が重要視される。ふとした瞬間に他人と出会った時、そこで隙を見せるようでは舐められてしまうのだ。下流以下の家庭では有り得ない習慣である。

田舎では持つ者と持たざる者とがくっきり別れている。中間はない。田舎で金持ちになる方法はただ一つ。強力な地場産業や広大な土地を先祖から継承することができるか否か。それだけだ。

だから有産階級と呼ばれる？持つ者？だけが富み？持たざる者？は他人から雇われる立場を脱することができない。

勉学によって上を目指すこともできるが、それによって就ける職など田舎には存在しないのだ。だから若者は機会を求めて田舎を出てゆく。残るのは持つべきものを持っている有産階級の人間か、田舎を脱する金も体力もない老齢の無産階級か、ということになる。

有産階級は、搾取者だ。

都会のことは知らないが、少なくとも田舎ではこれが確定事項なのだ。

自分の力によって一から這い上がるのではなく、先祖代々受け継がれた物によって地位が定まる。しかもそれが揺れ動くことはない。

土地は利益を産む。その利益から税を支払い、土地を維持する。需要は変化しない。だから供給も変化させる必要はない。

田舎には進歩もなければ競争もないのだ。

つぶし合いを前提とする都会の掟など、ここには存在しない。
他人を不幸にし、田舎に退廃的な風潮をもたらすだけの連中。
富豪は親戚が多い。だから悲しむ人々も一般庶民を凌いではいよう。しかしその死を喜ぶ人間は、悲嘆に暮れる遺族の何十倍何百倍という数にのぼるはずだ。死んで喜ばれる暴君、独裁者。
こいつを殺さない手はない。
ターゲットは何も知らず、野外展望台へと向かっている。
標的のばあさんが歩いているのは、歩行者から自転車まで、気軽に利用できるように整備された綺麗な道だ。赤みがかった煉瓦タイルが敷き詰められているためか、地面はアスファルトのように無粋ではなく、実に公園らしい華やかさに満ちている。
小さな歩幅でちょこちょこと歩くさまは気品すら感じるが、股をひらけないというのは、俺の前では致命的な欠点となるのだ。
ばあさんは展望台の木製ベンチに座ると、腰に下げていた筒状の袋を持ち上げた。口紐を開き、露出したふたを外す。それからその外したふたを湯呑み代わりにして、秩序立った仕草で茶を飲みはじめた。
始動を待つ筋肉が俺の四肢を振るわせた。
まだだ。まだ近づけない。
待つんだ。
チャンスはもうすぐやってくる。
ばあさんは水筒を細長い巾着に戻した。
それから腰を重そうに持ち上げる。
尻を軽くはた叩き、転落防止用の柵へと近づいてゆく。
俺はじわりと上体を持ち上げ、僅かに頭を出して南側の斜面を見下ろした。
夕陽があまりにも傾きすぎているせいか影が多く、見えにくくなっている部分が多い。
しかし目視できないほど暗いというわけでもない。
人の姿は……煉瓦タイルの道にも……脇の芝生にも……どこにも

ない。北の林道からは……もう誰もこないだろう。
これば かりは祈るしかないが、少なくともこの丘の隠れ家に身を隠してからというもの、人の姿は見なかったのだ。ここは自分の得た情報を最大限信用するしかない。
展望台の一帯は煉瓦タイルで埋め尽くされている。
ここからばあさんのいる断崖上の柵部分まで、三〇～四〇メートルといったところか。
小走りで近づかなければチャンスをフイにする可能性がある。
しかし登下校用の革靴ではかなり慎重に動かなければ音が目立つのだ。前回のように偶然のチャンスを衝動的に生かしたものとは違い、今回は一瞬の機会を狙って動いている。失敗は許されない。
丘を降りた俺は芝生の上をしばらく駆けた後、舗装地面との境界線部分で靴を脱いだ。靴下だけになってしまったが、これで隠密行動をとることが可能となった。足裏の多少の痛みや違和感など、この際問題にすらならない。
ずんずんとばあさんの背後に近づいてゆく。
標的まで二〇メートル……一五メートル……一〇メートル……。
あともう少し。あと数歩。そんなところで、俺の足は動きを止めた。
いま、夕陽は頭頂部のみを山の向こう側から覗かせている。
西側、俺の後背。
当然、うしろから日を浴びれば前に向かって影が伸びる。そしてちょうど今、俺の頭の影がばあさんの足元に落ちている。
これは……下手をすれば、こちらの存在まで察知されかねない。
俺は緊張しながら、注意深く前へと進んだ。
自分の影が紫色に染まった背中にかかる。
この和服を着た富豪は、海だけを見つめていた。
果たしてこのばあさんは俺の影に気づくだろうか？
いや、無理だ。
前回のじいさんも、海を見ていたせいだろう。俺の存在を感じ取

ることもできなかったのだから。
これなら――――いまの状態なら、後ろを振り向かれでもしない限り、危険はないはずだ。
俺の下半身に脳からの電気信号が伝達される。脚部の筋肉が、また運動を始めた。靴を脱いでいるため、完全なる無音の歩みである。
俺の影はばあさんの腰に……そして背中にかかった。
その時――。
カランカラン
ゴロゴロゴロゴロ……
!?

何の音だ!?
俺は振り返るまでもなく、直感で何となくわかった。
水筒だ。きんちゃく巾着に入ったばあさんの水筒。
学生服の裾に、一瞬だが何かひっかかりがあった。ただベンチの背もたれを擦ったわけではなかったのだ。
終わりだァ……おわりだ、おわり。
「あら……？」
ばあさんが振り返る。
「あなたは――」
それから眩しそうに手をかざした。
そうだ。俺の真後ろには夕陽がある。
逆光だ。逆光で見えないんだ。
だがだからといって今更逃げられるものでもない。
進むしかないんだ。
前へ――――非現実の世界へ！
「ウオオオオオオアアアアアアアアァァァッッッ！！！！！」
俺は雄叫びを上げながら突進したッ。
驚いたばあさんは背中を仰け反らせながら半歩後ろに下がり、柵

にぶつかった。その拍子におおきくよろめき、断崖の底に落ちかける。
俺はその一瞬を逃さなかった。
両腕を交差させ、ばあさんの前に突き出す。
ドン！！
「あっ、あっ、あああああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――」
ドチャッ……
……よし……
……よし！！
死んだッ！
これで死んだぞ、あのババア。
聞いたか？　あの音を。
背の低い囲いから落ちた。両手を振り回し、空を掴みながら、あのばあさんは落ちた。
生きているわけがない。死んでいるはずだ。
この崖の正確な高さは知らないが、じいさんの脳髄がはじけ飛ぶくらいの高度なんだ。七～八階建てのビルから飛び降りたようなものだろう。
即死だ。即死！
それにあのババアの顔。
見たか？　あの引きつった、驚きと恐怖に満ちたツラをヨォ。
腐るほど金を持った搾取者。
貧乏人の恨みを買いに買った卑劣な醜女。
他人の痛みなんてまったく知らないゴミカスババア。
そいつが――――死んだ。

フフフ……ふひひひひひひひっひ……。
死んだ。死んだ。死んだ死んだ死んだ。死んだんだあのババァは。命を失ったんだ。さっきまで生きていたくせにもう動くこともできねェ。肉のかたまりになっちまったんだよぉあいつは、あのババアはッ！！
それをやったのがこの俺！　俺が殺した。俺が抹殺した。俺がやつを人間から生ゴミにしてやった。俺が虫けらみたいにあのばあさんを殺したんだ。このおれが！
ハァァ……なんて――なんて快感！
ンッフフフフフフッ。
身悶えしちまいそうだ。
今の俺の顔だって、もうニヤけがおさまんネェ。
あぁー気持ちわりぃなオレ。だってもう笑みが漏れ漏れなんだもん。満面笑顔なんだもん。人間をぶっこわすのがこんなにおもしろいなんて。こんなに楽しいなんて思いもしなかった。こんなすげぇ娯楽があったなんて、なんで今まで気づかなかったんだ？
損してた。損してたよ俺。
たったこれだけで、これだけのことで人生がこんなにも美しく栄えて見えるなんて。美しい自然サイコー！　冬の風がキモチイー！
あっはははははははは。いっひひひひひひふふふふふふふ……。
よし。楽しんだ。存分に楽しんだ。
さぁ――――逃げよう。逃げよう。
人の影は――――見渡してみるが、やっぱりどこにもない。
そういや自転車はどこにおいたっけな？
ああ、トイレの裏だ。
足取りが軽い。軽すぎる。このまま歩き続けたら、きっと空も飛べるはず！
ぁぁ……殺人……犯罪……反社会的行動……それも飛び抜けたレベルの常識破り。

俺は楽しみを知った。知ってしまった。
誰でも犯罪に対して恐怖を覚えている。だがその恐ろしさの正体は道徳意識じゃあない。刑罰と快楽の天秤がどちらに傾いているか、それだけが常人と異常者の間に横たわっている違いなんだよ。
一度進んでしまったら後戻りできないだって？
違うな。
後戻りする必要すらないんだ。
一週間前、俺は一人の人間を殺した。
その時はまだ何もなかったことにして日常生活に回帰することだってできた。しかし今となっては……その理由すらみつからない。
俺は普通という名のレールから脱線したんだ。それも自分の意志で。
殺してやる。もっと、もっと殺してやる。
児童だろうが老人だろうが男だろうが女だろうが障害者だろうが健常者だろうが弱者だろうが強者だろうが総理大臣だろうがホームレスだろうが、見境なんてつけるもんか。とにかく目についたやつを片っ端から殺してやるんだ。
分別を知らないガキと同じさ。
ヤツラが虫を踏みつぶして遊ぶように、俺も人間を潰して遊んでやる。高尚な存在と自称している人間どもを、ただの肉塊の一つにしてやる。
遊んでやるんだ。他人の命を使って。
これは壮大なひまつぶしさ。
バレないように……バレないように……一人ずつ……今生から消して行こう。
日常を謳歌しながら、裏では大量殺人を行う。
どこまでやれるかな？
どこまで楽しめるかな？
たぶん、長続きはしないだろう。
だが俺はそれでも構わない。

だって知ってしまったんだもの。
殺人という名の快楽を。
「んっふふふふふふ……ふはははははっ」
自転車に跨がりながら南の斜面を下っているとき、俺は自然と笑っていた。
「うひひひひひひぃっひひ。俺がじいさんを殺した。
そして今度はばあさんを殺した。
これで……
これで……
これで……
これで……
これでッ
これで二人目だッッッ！！」

さて、翌日。
ニュースは瞬く間に広がり、学校だけでなく、近所でもどこでも自殺の話題で持ちきりの状態だった。
こんな辺鄙な田舎では自殺者が出ること自体稀なのに、週間隔で立て続けに二人も死人が出たのだ。それも同じ場所で。
『霞ヶ原公園は呪われているんじゃないか？』
『あの崖は昔から自殺スポットだったらしい』
『村八分にされた人が、あそこで始末されたとか』
人々の口からこれまで聞いたこともない？真実？の歴史が次々と明かされ、もう無茶苦茶である。無論、これらの噂に裏付けなどまったくないことはいうまでもなかろう。
しかし事件が起きれば流言は飛ぶように広がる。
単なる創作や聞き間違いや昔話の類が色々と混じり合って、噂という名のエサへと変化すると、人々はこぞってそのエサに食らいつくのだ。彼らは十分に満足するまでそのエサをしゃぶり尽くし、飽きたらポイッと捨てるのである。そこに情け容赦などない。食べては排泄するというサイクルと同じ、単なる消費物でしかない。
噂話が耳元を掠めるたび、俺は心身の充足を感じていた。
俺の行動が、殺人が、ひとごろしが、世界に影響を与えている。周辺の環境を、明らかな形で変えてしまった。
俺が変えたんだ。俺が二人の人間を殺しただけで、二つの命を奪っただけで、環境は激変した。
みんなが噂している。俺が起こした事件のことを。
これはつまり、俺の噂をしているのと同じなんだ。
俺が噂されている。だれもかれもが俺のことを口にし、俺の行動に注目し、そして――次の噂。つまり、次の？自殺？を待っている。待ち侘びている。

ここまで期待が大きくなったのだ。応えてやらねばなるまい。すべての噂話の中心にいる当事者としての、これは責務だ。
その日の放課後。俺は早速行動を開始することに決めた。
俺は待てなかった。衝動を抑えられなかった。だが暇を持て余して噂を楽しむ意外に娯楽がない連中も、次の自殺なんて待っていられないのだ。
彼らはもっと盛り上がりたがっている。もっと騒ぎたがっている。もっと事件に起きて欲しいと願っている。
ならばその願い叶えてやろう。
いつとは言わない。いますぐに！

霞ヶ原公園に到着した俺は、早くもターゲットを見出していた。
くたびれた背広を恥ずかしげもなく着込んだ初老のサラリーマンらしき男が、展望台から海を眺めている。
いつもなら見つからないように隠れて抹殺する俺だが、今日は趣向を変えてみるのも面白かろう。どうせ相手は死ぬのだ。姿を見られたところでなんのことはない。
「お散歩ですか」
俺は堂々と近づき、男の左側に立って話しかけた。
男は――確かに初老ではあったが、目尻などの局部には年齢に相応しくないほど数多の皺が刻まれていた。全体的な肌のハリ艶は歳相応だが、髪には白髪が混じっており、その老け込み具合たるや定年間近の鳶職人を思わせる風合いである。
「ええ、まぁ……」
男の返答は投げやりで、目には輝きがなかった。。
どうも所在なげで、無目的な暇潰しにここへきたという感じだ。
散歩ならまだ？歩く？という明確な目標があるだけ行動がハッキリしているのだが、こいつは違う。何かがおかしい。
「どうなさったんです？　元気がないようですが」
「君、高校生？」

「そうですが」
「そうか。若いねぇ……。良いことだ、うん」
――何が言いたいんだ？　このおっさん。
「若さは希望だよ。未来に可能性がある。目標を持てる。すべて私にはないものだ」
「失礼ですが、お名前を教えて貰っても？」
「名前か……名前ね。あまり意味のあるものではないが、いいだろう。私はたなべ田部という者だ。たなべ田部よしかず良和」
「そうですか。田部さん」
「君の名前は？」
「俺は前田です。下の名はふみよし郁佳」
「ふみよしくんね。うん。いい名前だ」
男は優しげな笑みを浮かべながら、しきりに頷いていた。
のれんに腕押し、という言葉が適切かどうかはわからないが、この男と会話していると、どうも手応えというか、実感がないと思えてしまう。
例えるなら幽霊と話を交わしているような、寒気のする感覚だ。
「郁佳くんは、どうしてこの公園に？」
「ただの寄り道ですよ。学校帰りによく来るんです。田部さんは？」
「私もまぁ、似たようなものかな」
「しかし会社勤めの方が平日のこんな時間に散歩だなんて滅多にないことですよ」
「そうかな。この公園は素晴らしいところだし、寄り道ついでにくる人だってたくさんいるだろう」
「スーツ姿のまま、ですか」
「……君はこの公園にはよく来るのかい？」
――話を逸らした！
今までずっと奇妙な感じとしか表現できていなかったものが、何やら明確なものへと心の中で整形されてゆく。
この田部とかいう男。やはり何の目的もなくこの霞ヶ原までやっ

てきたわけではないようだ。何かある。その意志がどこへ向いているか、何となく推測はできるのだが、まだ確信はもてない。
もう少し会話をしてみる必要がありそうだ。
「俺はたまに寄るくらいですよ。田部さんの方はどうなんです？」
「私はね、実は初めてなんだよ」
「はじめて？」
「町の観光パンフレットをたまたま見かけてね。写真でみたこの海の眺望できる丘の風景をどうしても実際に見てみたかったんだ。それにこの霞ヶ原公園は、全体が素晴らしくできている。南側からずっと道を登ってきたときですら、冬の花があちこちに咲いていて、感動すら覚えたよ。本当にいいところだね、ここは……」
そう言うと、田部さんは感慨深げに大海原の果てを見つめた。
ここにいると吹き荒ぶ風のはしゃぎ声や、遠くで騒ぐ波のざわめき、断崖にぶつかって飛沫を上げるうねりの音などがすべて混じり合って聞こえてくる。
これで季節が夏であれば爽やかな気分にもなれようものだが、冬だとまた違った雰囲気が醸し出されるように思えるのだ。
寂しさ、虚しさ、悲しさ。
そういったものが胸の内から込み上げてくる。それはこの田部とかいうサラリーマンを見て覚えた印象と同じだ。
「田部さん。人生って、つまらないと思いません？　毎日同じことの繰り返し、それでいて将来が見えてしまっている。確定した未来のためにいま現在を生きるなんて、苦痛でしかありませんよ」
「……若いのに、ずいぶん達観しているね。でも君の言う通りだと私も思う。たしかに人生はつまらない。その上で？つまらなさ？に？苦痛？が足されたら、どうなると思うかね？」
「苦痛？」
「生きることそのものが苦しみになるということさ。ふみよし郁佳くんのご両親はまだ健康なのかな？」
「そうですが……なんでまた」

「私の両親も、ふみよし郁佳くんの両親と同じく、まだ生きている。しかし生きているというだけで、脳は半分死にかけているんだ。？認知症？という言葉を聞いたことがあるだろう？」

認知症！

確かに、聞いたことはある。アルツハイマー病とかパーキンソン病とか細かい分類があるらしいが、要は？ボケる病気？なのだ。

介護疲れで親を殺害、なんてニュースもたまに報道されている。

まさかこの男も？

「私の場合は、両親が共に認知症を発症してしまったんだ。介護のため頻繁に会社を休んだり早退したりしているせいで悪口をよく言われるようになってね。いまや職を失いかけている。いよいよ日常の繰り返しすら不可能になりつつあるんだよ。まだギリギリのところに立って耐えてはいるが、そろそろ限界でね。もうすべて終わりにしようかと、最近ではそう思いかけているくらいだ」

「終わりって――」

「死ぬってことさ。この崖では、すでに二人の老人が自殺しているんだろう？　ニュースで知ったよ。その二人が三人になったところで、さほど悪評が高まることはないだろう。それにこの高さだ」

田部が無防備にも、手すりから上半身を乗り出して真下を見た。腹を柵に押しつけ、小さなうめき声をあげる。

殺すなら、最大のチャンスだ。

だが俺は手を出さなかった。いや、出せなかった。

一瞬間の後、田部は姿勢を元に戻す。

「確実に死ねるだろう。中途半端な結果にはならないはずだ。それにここへ来るまでに見ることができる美麗な景色は最期の餞に相応しい。見渡す限り広がる海原と彩り豊かな木々の自然。これらの絶景こそが、人間など自然の一部でしかないということを教えてくれる。生への執着を取り除いてくれる」

「それで田部さんも、ここへ引き寄せられたということですか」

「どうかな。私はまだフラついたままだ。ここまでやってきておい

て何だが、決心がついたと思ったのにまた揺らぎはじめている。優柔不断は生まれつきとはいえ、この歳になってもまだ悪癖を改めることができないんだ。救いがたい悪人のさが性だよ、まったく」
「はたして、そうでしょうか」
「なに？」
「人生は、葛藤です。、悩みがあってこそ、人は成長するものです。人間の生き方から精神的苦痛、肉体的苦痛を取り除いたとき、そこからは同時に成長の余地まで消え去るもの。悩むこと、苦しむことこそが？普通？なんですよ」
「普通……」
何をやっているんだろう、俺は。
殺すつもりの男とちょっと会話するばかりか、自殺を思いとどまらせるような言動を発してしまった。労せずして死人が増えるチャンスなんだぞ？　勝手に自殺してくれようというのだから、それを煽るべきであるのに、今の俺は、何かヘンだ。
「怖いんですか？　落ちることが」
田部さんは無言になった。
口を一文字に結び、沈黙を続ける。
それは限りなく続く静けさに思われたのだが、意外に早く彼は現実を受け入れた。
「確かに君の言うとおり、私は臆病だ。人生から転落することを恐れている。いま、私はなんとか正社員の地位を保っているが、それがこれからは不可能になるんだ。両親のせいで私の人生は破滅する。そんな未来が目に見えているからこそ、その前に、まだ光明が絶えていないうちにこれまで続いてきた一生を終わらせようと思うのは、不自然なことでもなければ、悪いことではないだろう？」
「悪いことですよ、それは！」
俺が声を大きくすると、田部さんは驚いたように目を丸くした。
もう少しだ。
もう一押しで彼の意識を変えることができる。

「田部さん。良いことと悪いことの違い、あなたはわかりますか？」
「何が、言いたいんだい？」
「簡単な話です。ある行いをして、良い報いがあればそれは良い行いであり、悪い報いがあればそれは悪い行いとなるのです。田部さん。あなたはいま幸福ですか？」
「そんなわけ……」
「そうでしょう。幸せなはずがない。ならばあなたがやろうとしている人生というドラマの閉幕も、やはり間違いだということになる。すべてを終わらせるには、まだ早いんです。だから逆にこう考えてみてください。人生から転落した先、つまり職を失い、生活保護に頼るほどの状態になったことを想像してみてください。その先にある未来は、あなたの目にどう映っていますか？」
「あまり、良くはないな」
「俺は認知症について、そこそこの知識はあるんですよ。田部さんのご両親の悪い部分は、脳だけではないんでしょう？　体まで悪くなるのが認知症だから、寿命も当然短くなる」
「君は……」
「あと数年です。田部さん。あと数年……。それだけ耐えれば、あなたは救われる。違いますか？」
「……だが、人生のレールから一度でも外れてしまえば、原状回復なんて不可能に近い」
「それでも自ら命を絶ってしまうことに比べたら、万倍も希望がある。そうでしょう？」
田部さんはしばしの間、俯いていた。
それから海の方へ体を向け、まっすぐ前を見つめる。
一陣の風が霞ヶ原を撫愛し、呼応するようにして遠くにある人工林のどこかでカラスが一鳴きした。
背後から輝々とした黄昏の光を受けているため田部さん顔は薄暗かったが、頬に流れた筋の一閃は、彼の心情を何よりも強く主張するのだった。

「親の死を願うなんて、私は罰当たりな人間だ」
「人は誰でも死ぬものです。そのきわ際までのいっとき一時を、幸せに過ごさせてあげる。そう考えてあげてください」
「君は、良い人間だね」
「まさか」
「いや、いいひとだよ。私はついさっきまで死のうかと思っていたのに、君と出会っただけで気持ちが揺らぎ、ついには考えを改めるに至ったんだ。……君に出会えてよかったよ。ふみよしくん」
「俺も同じ気持ちです」
田部さんから、陰鬱な雰囲気は消え去った。俺の目の前に立っている男は、いまや死人ではない。生きようという意識に満ちた一人の人間だ。
ああ……これだ。
これだよ。これ。
気持ちが死んでいる人間を殺すなんて、無意味でつまらないものだ。まるで俺がこれまで積み重ねてきた人生のように退屈そのもの。でもこの田部という男。いまは違う。生きようとしている。生きたいという気持ちに溢れている。
なんて――なんてことだ。
俺の感情が活動を再開した。
封印された魔物のように静かだったものが、それを解かれて動き始めた。
死人にはぴくりとも反応しなかったのに、生きているというだけで、その意志に満ちた人間であるというだけで、油を注がれた炎のように燃えさかるとは！
俺の気持ちは定まった。
この男を――――殺したい！
「じゃあ、そろそろ帰ろうか」
「待ってください！」
「うん？」

「あとちょっと、お話しませんか」
「ちょっとと言っても、もう時間も遅いし、私はともかく君はそろそろ帰ったほうがいいんじゃないかな？」
「俺は大丈夫ですよ。ただ、ここで亡くなった方について思いを馳せるのも大事だと思うんです」
「ほう、きみはロマンチストだね。でもまぁいいだろう。きみの言うことだ。従おう」
「ありがとうございます。それでは崖の下、あの磯の岩が見えますか？」
「どれどれ？」
男が身を乗り出す。
俺はさっと周囲を確認した。
人影はない。
「もっと真下ですよ。そこの岩に激突して、自殺した方々は亡くなったんです」
「うぅ～ん。……改めて見てみると、この高さは結構怖いな」
「現場はかなり凄惨だったそうです。二人とも、顔面は元型を留めなかったとか」
「私は危うくその次の自殺者になるところだったんだね」
「――何を言っているんです？　これからなるんですよ。その三番目にね」
「え？」
男の姿勢は、まさにベストだった。
上半身は柵の向こう。下半身は重心がなくなり不安定。体を支える中心は柵に移り、それを両腕が支えている。
俺は男の足首をつかむと、おもいっきり引き上げた」
「あっ、なっ、なにを！」
「ふふふふふふふっ」
もう笑み顔を我慢できない。
男は面の皮を思いっきりひっぱったような凄い形相で俺を睨む。

その顔を見て、俺は更に大きな満足感、充足感を覚えたのである。
「や、やめなさい！　冗談では済まないぞ。い、いきなり、こんなこと！」
「冗談ですよ。俺にとってはね」
「じゃあ早くやめるんだ！」
「嫌です」
「はあ！？」
息を荒くしながら、男は必死になって全身の筋肉に力を込めている。俺はそれがおかしくてたまらなかった。
「俺は殺すフリをしているんじゃないんですよ。冗談、悪ふざけ、いたずら。その延長であなたを、本当に殺そうとしているんです」
「ふざけないでくれ。たのむ。たのむから早く手を離すんだ！」
「わかりました。お望み通り手を離しましょう。柵の向こう側でね」
まるで梯子を立て掛けるような動作で、俺は男の両足を持ち上げた。
ズボンと靴下を通してでも、男のぬくもり、恐怖が伝わってくる。
「わっ、わっ、わああぁぁっ！！」
限界まで上げてしまえば、あとは楽なものだった。
男は足をジタバタさせながら一気に崖下へと転落していった。
大成功だ！　やっ……
――俺の気持ちはあるものを見つけて急激にしぼみはじめた。
柵に残っている人間の手。どう考えても千切れたのではない。
身を乗り出すと眼に映り出す男の腕、男の胴体。
彼はなんと、柵を掴んだ両手を離すことなく一回転していたのだ。
「ハァ、ハァ、ヒッ、ヒィ、あっ、はっ、くぅっ、ぐっ」
息を吐いては止め、止めては吐き、繰り返しながら両腕に力をいれて懸命にこらえている。
「はっ、はやくっ、たすけっ、てっ」
「頑張りますね。手を離せば楽になるのに」
「ふみっ、よし、くん、きみはっ！」

俺が見下ろし、田部さんは見上げている。
天国と地獄。生と死。
俺と彼の間には、その境界線が引かれているのだ。
「そうです。ここで死んだ二人は俺が殺しました。面白いものでしょう？」
「きみはっ、なにをっ、いっ、てっ」
「大丈夫ですか？　言葉がとぎれとぎれですが」
「ぐうっ……」
俺は頬の筋肉が一気に弛むのを自覚した。
楽しい。
純粋に、ただ楽しい。
ああ、死ぬ。この男はもうじき死ぬ。
たなべ田部よしかず良和。享年何歳？　知るかボケ！
顔と名前と性別。それくらいしか知らないおっさんが俺の前で死にかけている。
そして助けられる奴は誰もいない。
喘ぎながらどんな絶望を味わっているのだろうか。どんな苦しみに耐えているのだろうか。生きたいという気持ちが彼をここまで生に執着させるのだが、その希望は俺がつくったものだ。作者には作品を壊す権利がある。だからもともと死人だったこのおっさんを生き返らせた俺にも、おっさんを殺す権利があるということになるな。
俺は目の前にある男の手を自分の掌で覆った。
「よ、しふみ、くん……」
「安心してください。俺がきっちり殺しますから」
「やっ、やめ……」
そろそろ限界だな。
だが諦めながら自ら命を絶つなんていうシチュエーションは、正直好みじゃない。やっぱり俺自身が手を下さないと、面白みがないのだ。
俺は手の筋肉に指令を与えた。指先にちょっとした電気信号を送

り、男の指をつまむ。
ゆっくりと、しかし確実に柵から指を外させる。
「あっあああああまっ、まってくれェッ！　頼むからァァァ……」
喉を枯れるほどに絞った声での懇願である。
なんて晴れやかなんだろう。胸がすくようだ。
俺は神になったのだ。
この瞬間、たなべ田部よしかず良和という男にとっての神になっているのだ。
だが神は無慈悲と相場は決まっている。
俺は容赦なく田部の指を開いていった。力ずくで。
一つ。
そしてまた一つ。
そうするうちに、男の腕はじわりじわりと滑り落ちてゆく。

「もう、だめだ……」

小さく、そんな声が聞こえた。
そして俺の目の前から、血管が浮き出た手と腕が消えた。
もうはき出せる空気など残っていなかったのだろう。気力すらなかったに違いない。田部は無言のまま、叫ぶことなく落ちてゆき、そして死んだ。肉が弾ける気持ちの良い音が聞こえ、また静寂が戻ってきた。自然のざわめきだけが耳に入ってくる。ムカつくような人間たちの奇声など、どこからも届かず、鼓膜を掠めない。
……やった。またやった！
また殺したんだ。
この俺がッ！

興奮！　昂奮！　亢奮！
情熱！　激情！　熱気！　熱狂！
血湧き肉躍るとはこのことよッッッ！！

ふっふふふはははははっひひひひひひぃっひひ。
とまらん。、
とまらんとまらん笑いがぁ笑いがとまらんっ。
ふひひひぃいいぃーひっひっひっひっひっひっ。
あっひゃひゃひゃひゃひゃひゃっはァァァッ！
痛かったのかなぁ？
どんだけ怖かったのかなぁ？
苦しんでいったのかなぁ？
ま、どうでもいいや。どうせ他人だし。
俺が楽しければ、俺が楽しめさえすればそれでいい。
他人は俺のことをどう思うだろう。
キチガイ？　狂人？　異常者？　偏執狂？　パラノイア？　快楽殺人鬼？　サイコパス？
全部アタリさ。
でも関係ない。
これは俺の本能だ。心の底から沸き上がる感情だ。これが俺の自然体。これこそが俺自身。
俺は殺すと決めた。抹殺すると決めた。だから殺し続けるんだ。誰にも文句は言わせない。
続けてやる。命の炎を吹き消し続けてやる。
限界に達するまで。俺が世間とその常識に勝つか、世間が俺を負かすか。
これはゲームじゃない。
俺が天より授かった命数を使い果たすまでの、ただのひまつぶしさ。

見られた？　見られたのか！？　俺の殺しが！

殺害リストが三人を突破してからというもの、俺は殺しを重ねるのに一切の躊躇をしなくなった。それでも夕方ばかりに殺すのでは怪しまれるだろう。俺は人通りが多いリスクを背負い込んでまで、休日に活動するようになった。

休みの日の公園は、いつもに比べてかなり賑やかだ。子供連れの親。カップル。老夫婦。ジャージを着て集団で走り回る学生集団。木陰で寝そべってあくびをかいているおっさん。集団でかけっこに興じる子供たち。

これだけ見ると賑やかなものだが、彼らは常に頂上の展望台付近をうろついているわけじゃない。展望台から人がいなくなることだってないわけじゃないし、数人から一人くらいにまで減少するとなると、かなり頻発すると言っても良い。

これはつまり、チャンスが何度でも訪れるということなのだ。

そしてベンチに座る俺の前に、幼女が一人……。

俺は警戒心を抱かせないようおもむろに立ち上がり、女の子の後ろについた。

「おじょうちゃん。どうしたの？」

「え？　……おにいちゃん、だれ？」

四〜五歳くらいだろうか。子供らしい派手目な私服を着ている。年齢に似合わないスカートを履いているのは、親の趣味であろう。現代的な子供の代表といえば代表だ。

丁寧に結んだ髪は綺麗にカットされていて、高い美容室に通っていることをうかがわせる。顔の造形も良い。俺がその筋の男だったら迷わず誘拐していただろうが、おあいにくさま、俺はちょっと性質が異なるのだ。

運がよかったね、お嬢ちゃん。それとも悪かったというべきか。

「さぁ、だれだろうね」

あからさまにとぼけてみせると、女の子は警戒した様子で辺りを見渡した。
マズい。大声でも出されてしまったら厄介だ。
「心配はいらないよ」
そう言いながら、俺は女の子の頭をポンポンと優しくたたいた。
「じつはね。いいものをみつけたんだよ」
「いいもの？」
「ちょっときてごらん」
俺はすっくと腰を持ち上げ、歩いて柵に近寄る。そして肩越しに背後を見た。
さすが幼女だ。疑いもせず俺についてきている。
柵のところについた俺は、大仰な動作で崖下を見つめた。腰を折り曲げ、手を額に当て、まるで宝物でも探すように真剣な表情で真下の波打ち際を凝視する。
「あっ、あった！」
「ええ！！　なに！？　なにがあるの！？」
ほんとうにバカなガキだ。クソみたいな演技で簡単に騙されてやがる。しかも俺の棒演技並に大袈裟な驚き方。エサを垂らしただけで釣れるボラみたいな魚と同じだな。
「あれだよ！　見えるかい？」
「え？　どれどれ？？」
女の子は高い柵によじ登り、手すりに足をかけて下を覗き込んだ。
本当にバカなやつ。
「ほら、あそこに天国が！」
俺は幼女の背中を、押すのではなく突き飛ばした。
びっくりするほど手応えがなかったのに、ガキはあっという間に俺の目から消えた。
あとはいつもどおり。ヒュー、ドサ、グチャ、さ。
子供は骨が軟らかいから、大人より酷いことになってそうだな。
そう思った俺は興味本位でもうちょっとこの展望台に長居しよう

としたが、ある女の声がそ　の野望を阻止した。
「きららぁ――――――！！　どこにいるの――、きららあぁぁぁぁぁ――――！！」
女はしばらく叫んでいたが、反応がないことに不安を感じたのか、野外展望台に立ち尽くしていた俺のところへ走り寄ってきた。、
「すみません。きららをみませんでしたか？　四歳の女の子で、スカートを履いてて――」
「ああ、それならさっき見かけましたよ」
「え、ほんとうですか！？」
「はい。たぶん本人じゃないかと」
嘘は言ってない。
俺の視線はいつものクセで、人工林の北道や煉瓦タイルの道に人影を探していた。
やっぱりどこにも、誰もいない。
いまはベストタイミングなんだ。チャンスなんだ。俺の野心を満足させるために、神様が与えてくれた機会なんだ。
存分に活用しようじゃないか。
神に祈りを捧げてやろう！
「それで、どこにいたんですか？」
「こっちですよ」
容易い。
「え、でもそっちは崖じゃ」
単純。
「ここまでくればわかります」
楽ちん♪
「わかりました」
滑稽。
バカだバカバカ。大馬鹿だ。
なんで俺が殺人鬼だって気づかないの？　なんで娘が事件に巻き込まれたとか思わないの？　なんでそんなに冷静なの？　なんで俺

を疑わないの？　なんでついてくるの？　なんで俺を信用するの？
なんでそんなに素直なの？　なんで柵まで歩いてきちゃうの？
なんで俺に言われるがままついてくるの？　そしてなんで、崖下を指差した俺に従っちゃうの？
君みたいに知能が低いと、簡単に殺せちゃうじゃないか♪
ここにまたひとり、自殺者リストに名前が加えられた。子供とあわせて二名。母と娘。母子共々の自殺である。少なくとも、世間はそう認識した。悩みのない人間はいないから自殺の理由を挙げようと思えばいくらでも想像がつく。争った形跡がなければ警察も動かない。
彼らがやるのはせいぜい自殺を思いとどまらせるための看板をつくるくらいだ。他に実りある行いは絶対にしない。俺のような人間がいることに気づきもしない。
世の中というものは実にユーモラスで、面白い。
殺人がこんなにも簡単にできてしまうなんて、これまで思いもしなかった。ひとごろしがこんなにも心躍る出来事だなんて、知りもしなかった。
俺は知ってしまった。世間の連中が誰も気づいていないことを知ってしまったんだ。
もう戻れない。やめられない。止めることはできない。
俺の興奮は日が沈んだ夜になってもおさまることはなかった。体内を激しく血が駆け巡り、そのせいでまるで眠くならない。
その晩、俺は自分の運命を悟った。
俺は殺しを楽しむ。楽しんで人を殺す。ただそれだけのために産まれてきたのだ。そのような天性を受けてこの世に誕生したのだ。だったら追求すべきだ。
珈琲党が珈琲豆の探求を続けるように、俺も殺害行為の探求を続けてやる。人殺しの醍醐味がどこにあるか、探し続けてやる。
人間は脆い。簡単に壊すことができる。そして人間はバカだ。簡単に騙すことができる。自分の安全を図り、その上で殺しを重ねて

やろう。何が俺を楽しくさせるのか、何が俺に変化をもたらしてくれたのか。徹底的に探し続けてやろう。
なぜなら俺は趣味を嗜む党の一つ？殺人党？の党員であるからだ。
翌週、一二月初頭の第一土曜日。
俺はまた老人を殺した。
単純な仕事さ。一瞬の隙を突くだけでいい。
機会さえ掴めればターゲットと会話したって構わないんだ。どうせ近づいて殺すという仕事に変わりはないのだから。
俺が殺ったのは杖をついたおじいさんで、彼はじわじわゆっくりとかたつむりの足取りで展望台の近くを徘徊していた。
「こんにちは。お散歩ですか？」
「あん？」
「そうですか。ではさようなら」
ドンッ！
それで終わり。
会話が成立していないって？
関係ないよ、そんなこと。
どっちにしろ相手は死ぬんだ。それに死人の数はもっと増える。俺だって暇じゃないんだ。一人一人の死に際になんて、いちいち構ってられないのさ。
そしてまた翌週。第二日曜日。
次は重い荷物を背負って山から下りてきたばあさんを殺した。
手法はこれまた単純。
荷物を持ってやると提案した後、その荷物を持ったまま展望台まで逃走。慌てて追ってきたばあさんが完全に息切れしたであろう瞬間を狙って腕を掴み、展望台の柵の向こうへと放り投げるようにして突き落とす。
第三土曜日。
懲りもせず展望台へとやってくるボケ始めた徘徊じじいを殺す。
翌日の第三日曜日。

仲良く歩いてきた老夫婦に声をかけ、海側に体を向けるよう誘導して背後から一押し。
第四土曜日。
今度はちょっと違う。
スーツを着た若者三人を引き連れた老人が展望台に到着。自殺の名所と化した観光地の視察という会話が聞こえた。
老人は有力町議の一人らしく、若者は新しく入ってきた町議という話。やがて老人は若者に金を渡し、若者は急ぎ足で南側の道へと向かってゆく。
大方パシリでもやらされているのだろう。
少々かわいそうだが、俺にとってはむしろ好都合。
一人になった町議は崖下を入念に観察し始めた。
俺はこれ幸いにと背後から接近し、無防備になった背中を両手で押しやった。
第四日曜日。
展望台に立ったまま海に向かって延々お経を唱える坊主を発見。
いまどき珍しい立派な僧侶だが、だからといって俺の気持ちが揺らぐことはない。
背後から一押し。
読経の声が虚空に消えると同時に、僧侶は波打ち際で本物のホトケさんへと進化した。
よかったね。仏教の修練坊主さん♪

そして大晦日を過ぎたあくる年、一月の第一土曜日。冬休みもそろそろ終わりかという時期のこと。
そろそろ老人に飽き飽きしてきた頃合いの俺は、次のターゲットにを若者に絞った。
タイミング良く展望台で一人になったのは、写真家らしき女だった。手にはＰＥＮＴＡＸのカメラが一台。どでかい肩掛け鞄はボンレスハムのようにみっちり中身が詰まっていて、ファスナーの間か

ら見たこともない長身の望遠レンズが飛び出していた。
髪型は単純なポニーテールで、服装はぴっちり張りつくようなジーンズに青い長袖シャツを組み合わせたラフなものだ。可愛らしさのかけらもないが、それが逆にそそられる。
俺は中央がへこんでいるいつもの丘に身を伏せた。葉陰のカーテンに開いた小さな隙間から展望台を覗くと、気分はまるで獲物を狙うチーターのようになる。
今は後ろ姿しか見えない。
この一帯は風が強い。
女の髪は風が吹くたび弧を描いて宙に舞う。
右から左、空気の波濤に突き上げられては斬り込むように落下する。
カメラで自然を撮影するには苦労する環境だと思うが、彼女はまるで動じていない。片手で本体、片手で望遠レンズを支えながら石像のように固まってもう一分以上突っ立ったままだ。しかも例のボンレス鞄を肩から提げたままで。
表面からは見えないが強靱な体付きをしているに違いない。俺が女なら確実に根を上げて座り込んでいるだろう。
俺は地面に膝をつき、頭を上げて南側の斜面を覗く。
疎らに人影が見受けられるが、まぁまぁグッド。距離から考えてあと五分は安全な状態が続くはずだ。それまでに決着をつけなければ！
立ち上がった俺は姿勢を落とし、体全体をバネにして、注意深く、それでいて素早く丘を降りてゆく。
雑草を踏みしめる音は風に紛れているはずだが確信は持てない。相手は若いのだから振り向かれて抵抗でもされたら厄介だ。それにそこそこの筋肉はついていそうだからな。
女は本当にまったくと言ってよいほど動かない。微動だにしない、という表現は人間に対してなど滅多につかえないものだが、彼女は例外だろう。

その姿は近づけばより鮮明になる。
盛り上がった尻から太股までのラインが艶めかしい。うなじから脇、そして腰へと至る線も綺麗なものだ。俺の通っている高校にいるような野暮ったい女共とは一線を画している。
『顔を見てみたい』
一瞬とはいえそんな思考が頭をかすめてしまった。
あぶないあぶない。
俺が相手の顔を見るとき、相手もまた俺の顔を見ている。そんな危険は犯せない。
俺の目的は？安全確実な殺し？だ。自分の身をさらけ出す行動をとれば命取りになる。寿命を縮めるような選択は愚か者のやることだ。俺はそんな短絡的な人間になどなれない。
煉瓦タイルの上に一歩目を記した瞬間、俺は思わず硬直した。
靴を脱ぐべきかどうか悩んだのだ。
裸足で行けば無音で殺せる。しかし固い地面に馴れていないから踏ん張りが効かない。靴のまま行けば全力を出せる。だが今度は相手に見つかってしまうかもしれない。
ほんの僅かな逡巡。それが俺の命取りになった。
女の体がぴくりと動き、腕がゆっくりと降りた。
カメラのレンズから目を離したのだ。
こうなったらいつ後ろを振り返るかわからない。
俺の危機意識が爆発する。
走れッ！　走れッ！　走れッ！
そうだ、走って女を弾き落とすんだ！
脳から四肢全てに対して信号を送る。
動け、走れ、前進しろッ！
これだッ！　これだこれだこれだあああああアアアアアァァァッッッ！
この興奮！　この熱気！　この緊張！　これこそ俺が追い求めていたもの。これこそ殺人の醍醐味。これこそ我が人生ッッ！
心の底から思える。本当に楽しいと。本当におもしろいと。

地面を踏みつける足首、膝、そして腰。突然の運動に関節が痛みで抗議しているが、それすらいまは気持ちぃい！
進もう、前へ。邁進しよう、未来へ。変革しよう、現在を。無くしてしまおう、過去の全てを。ようこそ、悦楽の世界。俺は上り詰めたぞ、神の頂きへと！
女は俺に気づいた。突然の足音にビビッちまったんだろう。振り返ると同時に愕然とした表情で後ずさりしている。なかなか綺麗な顔をしているがもう遅い。いくら若くとも所詮は女。俺のタックルを食らってまともに立っていられるわけがない。
露出した顔と手が氷のように冷たくなっている。激しい運動で熱が籠もる前に、公園の風をまともに受けて凍傷寸前の状態だ。だが今の俺は風とまさに一体化している。つむじ風がやがて竜巻となり人をさらうように、俺もまた天狗風となって女を吹き飛ばすのだ。
女は始め躊躇いがちにカメラで身を守ろうとしたが、すぐにそれを下ろした。こういう愛好家にとってカメラは命よりも大事なものと聞く。手に持った金属の塊を俺に投げつければ生き残る可能性もあったろうに、女は自らその機会を捨てたのだ。
オオオオオオオオオオオオオオオオオオオォォォォォォォォォォォォォォ！！！！！
俺は片手だけで身を守る女に容赦することなく、男の総身を全力で激突させる。
キャアアアアアアアアアァァァァァァァァァァッッッッ！！
女の体が宙を舞った。
柵の上を超えた。
やったッ！　これで死んだッッ！　確実にッッッ！
だが――――
――――女の体は不自然な動きをした。
ガクッ、と。まるで何か見えない幽霊から捕縛でもされたように空中で静止し、落下する。しかし落下すらピタリと止んで、その体は宙に浮いた。

ゴン、という鈍い音と共に柵に引っかかったのは、例のボンレス鞄……。
しまった！　また一撃で殺せなかった！
くそっ、クソクソクソクソッ！
柵の下を覗くと、女はジタバタともがきながらなんとか上に戻ろうと手を伸ばしていた。
視線が合う。
そしてあってはならないことが起きた。
「ち、ちょっと！　……あれ？　前田くん？」
！？
何だ。
誰だ。
誰なんだこの女。
なぜ俺の名を知っている？
「前田くんでしょ？　前田くんが私を突き落としたの？」
マズいッ！
わけがわからないが、この女、俺のことを知っている。
俺はこいつの顔なんざ見たこともないのに、こいつは俺のことを知っているッ。
もう逃げられない。
もう後戻りできない。
どんな言い訳も効果がない。
ここまで来たんだ。あとは殺すしかない！
俺は自分の両手に渾身の力を込め、パンパンに膨らんだ鞄に手をかけた。
懸命に取り外そうとする。
「まって、やめて！」
「黙っていろ！」
女が騒ぐが、気にしてはいられない。
引っ張る。押しやる。つぶす。叩く。殴る。揺さ振る。また引っ

張ってみる。
クソッタレがッ！　まるで効果がネェ！
こうなったら……。

ド　ン　！　　！　蹴
ン　っ
蹴　って　ド　て
！　て　蹴りまくる
ン　っ　ド　ン　！　しか
ド　蹴　ないッ！

これで
「やめて！」
どうだ
「ッ……」
早く
「イヤッ」
落ちろ！
「あぁっ」
すべての力を
「やっ……」
爪先に込め
「めっ……」
全力で
「ッ……」

蹴り
上げるッ！

「死ネエエエエエエエェェェェェェェェッッッ！！！」

飛んだ――――

――――――――

――――違う。

割れた。

パンパンに詰まった鞄が裂け、中に詰まった高級そうなカメラ、レンズ、フィルム、電池、三脚が、空気の海を泳いでいる。

クラゲが海を漂うように、ビリビリメチャクチャバラバラに破れた布きれを従えて、三脚が、カメラが、レンズが、電池が、バッテリーが、そしてフィルムが、空を舞っている。

何もかもが無限に続く幻の如く思える瞬間だった。光を反射するレンズの光すら明確に脳裏へ焼き込まれた。丘を弄ぶ狂風は止まり、自然の営みすら映らず、瞬刻も数刻同じ大河で抱き合って流れているかのように脳で、体で感じることができた。

だが、一切はうたかた泡沫と同じく、一瞬で消え去った。

三脚が煉瓦タイルに激突し、カメラ本体は地面にはじかれ、望遠レンズが柵上を跳ね飛び、フィルムや電池は崖の向こうへと転がってゆく。

舞い散る布切れは吹雪となって眼前に膜を降ろし、ときおり見える隙間には落ちゆく女の姿が映った。

「や、やった……」

無意識にフラフラと柵へ近づき、下を見る。

！

俺は思わず仰け反った。

予想外のことが、また起きた。

崖下の波打ち際に人がいた。それも見間違いでなければ、知り合いだ。

クラスメイトのさぬま砂沼ふたちょ双智与。いつも？ふとっちょ？というあだ名で呼ばれている。

そいつが真下にいて、落下死体を眺めていた。あの横にも縦にもデカいずんぐりむっくりとした体格。夏も冬も年中変わらないスポーツ刈り。見間違えるはずがない。

「なぜあいつがここに……」

理由はわからない。

だが俺の殺しが目撃されていたとしたら厄介だ。奴がどこからどこまでを知っているのか、それを確かめるためにも長居するリスクを承知で下に降りるしかない。

絶壁のすぐ真下にある岸辺へは、岩を削りだして造成された手すりつきの階段を下って行く以外ルートはない。

この辺りはこれまでウニが捕れるということで近くに住む住民がウニ狩りを楽しんでいた。しかし最近漁協に目をつけられ、ウニ漁禁止の看板が設置されるにいたったのである。・

ほとんど人を見かけないほどひっそりと静まり返った海岸はそれまでの状況を知る者にとっては不気味だが、俺にとってはむしろ好都合だ。加えて連続自殺のお陰で『ウニが死体を食べている』との噂が広がり、漁協組合員すら近づかないようになった。まさに理想的な犯行現場であると言えよう。

問題は、誰もいないはずのここにふとっちょがいたことだ。

階段を降りた場所には大岩があり、ふちょっちょのいるところからは目視できないようになっている。

この大岩は風と波で崖が削り出された際に少しずつ露出し数百年かけてその崖から落ちた代物だと聞いたことがある。周辺に転がっている小さな石や大中さまざまな岩々もそれと同じようにして数百年、または数千年の時をかけて堆積したものらしい。

俺はその歴史の恩恵に与りつつ、注意深くふちょっちょを監視する。そして耳を研ぎ澄ませる。

ここからだと波が激しくぶつかり合う大音、渦巻く風の轟き、遠くを進む小型漁船の機関音が鼓膜を蚕食し、崖上の展望台で耳を刺激した自然のささやきは一切聞こえない。

まるでこの世はただ海と崖だけが支配する場所であるかのように、自然が自己主張しながら中耳の玄関を叩くのである、
ふとっちょはできたてホヤホヤの遺体を見つめ、しゃがみ、細い流木の枝でつっつくなどしていた。
普通、死体を見れば相当に驚くはずだ。人によっては悲鳴すらあげかねない。
しかしふとっちょは知的障害があるからどうかはわからないが、遺体に興味を持ち、いじりはするものの声は上げないし逃げもしなかった。
俺は展望台を見上げた。
鞄を蹴り上げ中身をぶちまけたさっきの騒動が嘘のように、ここからでは崖上の様子がまるで見えてこない。
遮断されているのだ。
視覚的にも、聴覚的にも。
展望台の先端は、ちょうど船の船首のように前へ突き出しているため、崖下からだとなかなか目視しがたい。その上なんとか見えるのは柵の外側。
つまりさきほどの騒動をふとっちょに目撃されていた可能性は低いし、仮に見られていたとしても鞄を蹴り上げた俺の姿までは見えなかったはずだ。俺が崖上から見下ろしたときでさえ、ふとっちょは死体に夢中で俺の顔は見ていなかった。
大丈夫、。問題ない。問題――
「よっ！」
「あがっ！？」
肩を叩かれたッ！
変な声を上げながら振り返った俺が見たのは、またもや顔見知り。
結ノ浜高校の生徒会長、いさはや伊佐早さねよし眞良。
俺は口をパクパクさせながら、しかし言葉が出てこない。
見られた？
見られたのか！？

俺の殺しが！
「なにやってるんだい？　こんなところで」
「なっ、な……」
「あっはははは。ここに僕がいるとおかしいかなぁ？」
「おっ、おかしいに決まっているだろ」
ヤバイ。
動揺が止まらない。
動悸も止まらない。
俺がここまでピンチに弱いとは知らなかった。
ただ追い詰められることに馴れていないだけかもしれないが、少なくともいまは外に滲み出る緊張をまるで隠せていないことは確かだ。
「僕はふたちょ双智与くんのお母さんから面倒を見るように言われていてね。今日も綺麗な貝殻をコレクションするとかで貝殻探しに付き合っているんだけど、ちょっと見失ったんだよね。前田くん。この辺で双智与くんを見なかった？」
「あ、いま……」
「いま、うん？」
俺が明らかに狼狽しながら視線を動かしたせいか、会長は訝しげに俺の挙動を見つめ、そして視線の向いた方向に頭を動かす。
大岩の端から、そっと反対側を覗き込んだ。
「あ、双智与くんじゃないか。でも、あれは……」
会長は瞬時に俺が狼狽している原因を理解したらしい。再び俺の方をみた会長の顔は、かなり険しいものになっていた。
「……あれは人だよね？　双智与くんが？」
「いや、知らない。俺はちょっとウニ狩りでもしようと思って」
「ウニ狩りは罰金だろ？　っていうか、どっちにしろ早く救助しないと！」
走り出した会長を、俺は止めることができなかった。それに止める必要も、もしかしたらないかもしれない。

考えるんだ。冷静に。
ふとっちょには知的障害がある。
一般人は『差別なんて良くない』と口では言いながら、実際には『いつか障害者が罪を犯すかもしれない』と怯えてもいる。
その内心の怯えを利用してやるんだ。
大丈夫。俺にならできる。何とか機会を見つけて――
「何をやっているんだキミはッ！」
まるで蛮族の雄叫びのような、それは突然の罵声だった。
会長が怒っている。しかもとんでもないボルテージで。
何事だ？　何がおきている？
俺は飛沫に濡れた不安定な岩場を歩き、大岩にしっかりと手をかけて反対側の様子を伺った。
会長がふとっちょの胸倉を掴んで揺さ振っている。
こんな光景、いままで見たこともない。
「なぜこんなことをやった！」
「ぼ、ぼ、ぼ、ぼぼ、ぼくはなにもやっっっっ――てない。ちがう。み、みつけただけ」
「なに？」
「か、かいがら、かいがら。さ、ささがして、そいで、おとがして、そっ、そそ、そいで、みっ、みつけた」
「バカな。ありえない！！」
会長は頭を振り、傍らの遺体を一瞥した。すぐにまたふとっちょを睨む。
「この子が……平古場さんが飛び降りたっていうのか？　あの展望台から！」
「し、ししし、しら、しら」
「もういい。とにかく、すぐに救急へ電話しないと！」
平古場？
携帯電話を取りだして電話をかけ始めた会長と、その前でうろうろと狼狽するふとっちょを見やりながら、俺はぼんやりと記憶の糸

をたぐっていた。
確か同じ学年にそういう名字の女子がいたな。だが彼女は普段メガネをかけていて図書室に入り浸るような地味な生徒だった。
突き落とした女は俺のことを知っていた。まさか、あれがメガネを外した平古場さんだというのか？
俺は同級生を殺したっていうのか？
まさか……な。

生徒会役員、就任

結ノ浜高校は田舎の過疎学校だが、それでもいっぱしの生徒会ぐらいある。

しかし残念ながら、この生徒会は生徒が自治をしているというポーズのためのもので、実際には何の権利も権力も与えられていない。

考えてみれば、当たり前だろう。

底辺高校の底辺生徒に自治などやらせようものなら、常識ハズレの滅茶苦茶な行動をとるに決まっている。俺が入学する前のことだが、全校生徒から集められた文化祭予算が酒盛りに流用されたとかいう話も聞いたことがある。

現在の会長であるいさはや伊佐早さねよし眞良はそんな過去の例を完全に覆すほどの真面目人間だ。しかしだからといって生徒会の慣例を変化させるとなるとさすがに許可がでなかった。

今年だけならばともかく、来年からはまた別の人間が会長になるのだ。その時も真面目人間が就任するという保障はない。生徒は卒業しさえすれば学校に無関係でいられるが、教師はそうはいかないのである。

さて、なんで俺が生徒会の話をしているかというと、・・ことは前回やった殺しにまで遡る。

カメラ片手にラフな格好で霞ヶ原公園をうろついていた女は、やはり女子生徒の平古場さんであったのだ。彼女はオフの時は眼鏡をはずし、趣味の自然風景撮影に勤しむのが日課になっていたという。先日公園内を歩いていたのも、その一環なのだろう。

平古場さんは生徒会の書記もやっていたそうで、当然ながら亡くなったとなればその席が空いてしまう。

会長は、現場を見た俺に事情を話し、ぜひ生徒会の役員に就任し書記の仕事をやって欲しいと願い出てきた。

これには大きな疑問符がつく。

？なぜ、俺なんだ？？
「それは……その……、まぁ、あれだよ。ふみよし郁佳くんはこの学校じゃかなり成績がいい方だし、平古場さんを発見した一人でもあるし、それに……そうだ。ここの書記は会計も兼ねているから生徒会費だけでも自由に管理できるし」
「賄賂じゃねーか！　まったく、会長らしくないな。どうした？」
「あの、実は……。ほんとのことを言うと、先日のあの件、黙っていて欲しくて……さ」
「先日の件って、平古場さんが飛び降りたあれか？」
「僕がふたちょ双智与くんをなじったことだよ」
「ああ、あれか。なんか人が変わったように激怒してたけど、結局ふとっちょは犯人じゃなかったみたいだし、完全なお門違いだったよな」
「そうなんだ。でもあれだけ怒ったのにはちゃんとわけ理由があってね」
　会長は頬を掻き、顔面を紅潮させたかと思うと次の瞬間には血の気が引いたように青ざめた表情で視線を落とした。
　なんだか忙しなく変わる信号機を見た気分だ。
「惚れてたんだ。平古場さんに」
「なんだって！？」
　意外な事実である。
「それで告白は？　付き合ってたのか？」
「いや、まだまだ。どっちもまだ。気持ちすら伝えてなかったんだよ」
「そうか。そりゃあ……」
　残念と言うべきか、良かったと言うべきか、ご愁傷様と伝えるべきか、言葉に詰まる。
「もう過ぎたことだし、執着しても仕方ないけど、双智与くんを一瞬でも疑った事実は消えないわけじゃないか。クラスメイトを疑った男だなんて、思われたくないんだよ……」

なんて……なんて純朴な青年なんだ！
俺は思わず感動していた。
この学校にはクズが多い。というよりまともな人間を探す方が難しいくらいだ。
そういう環境の中でたった一度クラスメイトを疑ったからといって、相対的な地位なんて順位が変わるほど落ち込むことなどありえない。それなのに会長は、そんなどうでもいいことを本気で気にしていたのである。
ここまで誠意を見せられた以上、断ろうにも断りにくい。
付け加えると、じつはちょっと野心が刺激された部分もある。
生徒会役員になれば、特殊教室の鍵などを楽に手に入れられるようになる。遅くまで残っていても怪しまれない。校内の情報にも精通できる。それに霞ヶ原での人殺しが派手になり過ぎていやしないかと心配していたところなんだ。渡りに船とは、まさにこのことであろう。
俺は口元に微笑を湛えた。
自分の意志で作り上げた、俳優のようなかりそめの容貌。
「わかったよ。ちょうど暇を持て余していたところだし、書記ぐらいやってやるさ。その代わりジュースの一本でも奢って欲しいところだけどな」
「あぁ……、ああ。もちろんだとも！　それくらいお安い御用さ。ありがとう！　ほんとうにありがとう！」
俺は俳優気分で作った笑顔のまま、差し出された会長の手を両手で握った。
以上のような流れで、殺人犯の俺は生徒会書記に就任する運びとなったのである。
そして現在、一月中旬。冬休みも明けて久しい週の月曜日。
放課後の生徒会室で、新年最初の生徒会が開かれようとしていた……。

「えー……。生徒会で行うことは事後承認だけなので、とくにやることはありません」
会長の声を聞いて、黒板にチョークを走らせていた俺の手が止まる。
『文化部作品展について』『卒業生講話者の選定』『修了式・卒業式の進行内容』
つらつらと書きはしたが、結局やったことといえば教師から渡された書類を読み上げて？承認？しただけ。
「おい、本当にこれだけしかやらないのか？」
「うん。やらない、というよりできない。承認以外の行動で許されていることは文化祭の進行や体育祭のチーム分けくらいだからね」
「……せっかく書記になったのに、結局大したことはやってないぞ。埋め合わせか？　俺は」
「まぁ、そんなとこかも」
「……」
俺が呆れた表情を投げ返したせいか、会長は慌てて取り繕った。
「あ、いや、当然それだけじゃないんだ。実は空いた時間を利用して、別のことをやろうと思っていたんだ」
「別のこと？」
「言うなれば？探偵ごっこ？……かな」
会長の目に力がこもる。
その瞬間、五つの視線が会長に向けられた。
生徒会は六名の役員で構成されている。各学年から一人ずつ男女が選出されているため、一年が二人、二年が二人、三年が二人、この生徒会室に入室しているのだ。三年だけは会長と埋め合わせの俺という男同士のコンビなわけだが、まぁこれは例外だろう。
一年の男は一目見てわかる大人しめのタイプで、この学校ならいじめの対象になっていても不思議じゃないようなやつだ。名前はまきのゆうり牧野優麗とか言っていたな。知らなければユウレイと読んでいたところだ。

その隣の一年女子はかさほたる嵩螢。漢字二文字だけの名前は珍しい。彼女はクセのあるショートボブの髪型をしていて一見真面目そうに見えるのだが、さっきから俺のことをチラチラと見ているのが気になる。俺が視線を返すと俯いたりして目を逸らすので明らかに挙動不審だ。俺のことを怪しんでいるのか？　まさか、それもなかろうが。

対面して座っているのは二年で、そのうち男子の方はなんと髪をうっすらと染めている。それにこいつは、実は俺も見たことがあるのだ。

この男の名前はつたぐれゆうや蔦畔勇弥。二年の不良グループに所属しているらしく、教師とよく衝突している。髪のことだけではなくいじめのこと学校外での素行のこと、よくもまぁ生徒会にいられたものだと言いたくなるくらいワルに染まりきっているのである。

どうしてこんなクズが生徒会役員になれたのか？　実際にはなれたという表現はおかしい。？やらされている？というのが正しかろうと思われる。

町立結ノ浜高校の生徒会も他校と同じく選挙をやるのだが、それは教師が選んだ人物を拍手で支持するという形だけの代物で、やり方は某独裁国家のなんちゃって民主主義に等しい。

だから役員というのは教師からほぼ強制的に任命される仕事なのだ。

蔦畔は素行が悪い。体育会系の教師も手を焼いて困っている。一方、生徒会長の伊佐早はまったく逆の存在である。

手本となる会長の近くに置いておき、本人が自省するのを促す。やり方として間違いではないが、現状、効果は薄いようだしあまり意味はないと思われる。教師が自分の仕事を減らすために会長へこいつを押しつけたというのが真相なのかもしれない。組織は常に上から腐るというからな。この学校の腐りっぷりも、単に生徒だけの問題というわけではないだろう。

そして次は二年女子のくぎさきけい釘崎荊さん。思わずさん付け

をしたくなるくらい、彼女は不良とは別の意味で目力がある。
あつぶち厚縁の眼鏡と黒髪ロングの組み合わせだが、目が大きいためが彼女から視線を浴びせられるとギョロギョロ動く瞳に心の底まで覗かれている気分になってしまうのだ。母親になったら絶対教育ママになるタイプだな。見た目でそこまで想像できる。
――おっと、またこっちを見た。
互いの目が交差しかけたが、寸前のところで会長のもとへ戻しきる。
その会長はというと、ちょうどいまから演説を始めんとしている様子である。
「つい最近までこの生徒会室で顔を合わせていた平古場さんを、みんなも覚えているだろう？」
一年二年は返答もなく、各々バラバラに頷いた。
分かりきったことをあえて質問するのは普通の問いではない。これは前触れなのだ。何らかの。この生徒会室に集合している役員はみな感づいているに違いない。
緊張が生々しい汗となって肌を這い、揮発して尋常ではない空気が醸し出されている。
「彼女は霞ヶ原公園の展望台から転落して死んだ……。世間ではまた自殺者が出たという噂ばかりたっているが、僕がその日に刑事さんから聞かされた話は違っていた」
俺は息を呑んだ。
あの時はとっさのことで無茶をやったが、やはり……。
「他殺の線が濃厚だという仮説を刑事は話してくれたんだ」
「なんだって！　他殺！？」
大仰に驚きながら、俺は心の臓の鼓動が早くなるのを感じていた。やはり証拠を残してしまっていたのだ。だが、どのような？
記憶を過去に遡ってゆく。
視線の警戒はしていた。目撃者がいるなら俺は真っ先に捕まっているはずなのにまだ無事だ。物的証拠も確定的ならあっという間に

逮捕状が出る。あとは……。
「現場で争った跡が発見されたという話だった。布製のバッグが裂け、中身もバラバラに飛び散っていたと。原因は無理矢理中身を詰め込んだバッグ自体。それが転落に際して柵に引っかかり、加えてそのバッグを何者かが何度も執拗に蹴り上げたことでついに破れてしまったのだそうだ。さて、問題は誰が破ったのかということだが、それもある程度判明している」
「指紋でも見つかったんですか？」
釘崎さんが急かして問うた。
正確な部分は何もわかっていないはず、という俺の予想通り、会長は頭を横に振った。
「指紋は検出されなかった。布は油が染み込むから、指紋も当然短時間で消えてしまうのだと聞いたよ。しかし現場では代わりに別のものが見つかった……。靴の跡だ」
瞬間的に俺の体温が高くなる。
犯行当時、俺は何の靴を履いていた？
くそ、記憶が曖昧だ。何人殺しても自殺認定されるからとタカをくくって服装に余り気を配らなかったせいだ。
もっと注意しておくべきだったか。
だがもう遅い。警察にはバレている。
会長は犯人確保に一歩近づいているのにもかかわらず、辛そうな表情で大きく嘆息した。
「……それが、本当のところを言うと靴の紋様自体はあまりハッキリと残っていなかったそうなんだ。けれでも、一応十分なくらいのものが一部だけ残っていた。なんだと思う？」
珍しく会長が話を向けてきた。
俺が選んだ返答は？無言で肩を竦める？だ。
「まぁわからないだろうね。靴っていうのはロット単位でまとめて製造するようになっている。これは工場にもよるんだけど、安い靴はまず例外なく工場の大量生産だからそうだと言えるんだ。で、メ

ーカーはどの時期にどの靴を作ったか区別するため、製造番号というものをつけるんだよね。大手なら色々と統一されてはいるけれど、零細だと多彩かつ多様になって、結構細かく――それこそどこからの注文でどこに卸したかということすべてがわかるようになっていたりするのさ。霞ヶ原で見つかった番号も、そんな零細企業のものだった」

会長は制服の内ポケットに手をつっこみ、メモ帳を出して視線を落とした。

「えっと……？CE183729VR？と書いてある。細かい部分の意味は企業秘密らしいが、これと同じ数字が当校の運動靴にも採用されている。僕の言っている意味、わかるかな？」

斜め下からの覗き込むような視線……会長は間違いなく俺に興味を持っている。汗を拭いたい気持ちを抑えて、俺は会長の問いかけに答えた。

「……つまり、この結ノ浜高校の生徒の中に犯人がいると」

「学年すら判明しているよ。……三年の運動靴と一致したそうだ」

「三年だって！？」

「刑事さんは僕を疑っていたんだよ。同時に君もね、前田くん」

自分の表情筋がぴくりと痙攣するのを感じた。

俺が疑われている？　警察に？

「でも現場にはふとっちょもいただろう。第一発見者の」

「彼に殺人なんてできると思うかい？」

「そうは思わないが……だったら俺だって、殺人犯になど見えないくらい善良だと言えなくもないはずだ」

「あっはは。そうかもしれないね」

軽く受け流された。

「じつをいうと、僕はこれから予定があるんだ。刑事さんとの面談の予定が入っているんだよ」

「警察が……学校に？」

驚いたのは俺だけではない。同じ生徒会を構成する役員も緊張を

隠せていない様子がありありとうかがえる。とくに二年の不良役員であるつたぐれ蔦畔は一見冷静に見えるが、足元からトントンと踵を叩くシューズの音が聞こえてくるのだ。バレバレである。

「ともかくもそういうことだから、生徒会の本格的な活動は明日以降にしなくちゃいけない。だから今日は早めだけれど、これで解散です。積もる話は先送りということで、みなさん、おつかれさまでした」

丁寧だが浅いお辞儀をして、会長は生徒会室を後にした。残された役員もそれぞれの足取りで部屋を出て行く。その流れに俺も従った。

そうして廊下にでたところで、自分の膀胱が膨れ上がっていることにやっと気がついた。今日は短時間とはいえ緊張の連続だったのだ。体の諸器官も敏感に反応するというものだろう。

その後、トイレへと急ぐ途中。やはり俺は会長のことが気になっていた。

刑事と面談するだって？　いったい何を話すつもりだ。

なんらかの聴取であることは確実だが、それなら俺にも接触があってしかるべきじゃないか。なぜ俺が無視されている？　なぜ会長だけ？

警察に関する情報が手元にないから、推測のしようがない。可能性はいくらでも考えられるが、だからこそ混乱してしまう。

仕方がないか。いまは先送りにするしか……。

俺は考えることより、下腹部に溜まった液体を空っぽにしてしまうことを優先することにした。

生徒会室はU字型になった校舎の三階にある。生徒数減少に伴って増加した空き教室の一つをそのまま流用しているため、周辺は妙なくらい静かだ。近くにあるトイレは、故障したまま放置され立ち入り禁止状態になっているものが一つだけ。他はちょっと離れた場所にある。現在利用中の教室の近くだ。だからトイレまで近づくと、放課後とはいえ部活動をやっている生徒が歩きまわっていてそこそ

こ賑やかなのである。
男子トイレの中に入る。用を足し、鏡の前に立って手を洗う。何のことはない、普通のことだ。しかし今日は、ちょっとばかり違和感があった。放課後の普段とは違う静けさの中で、誰かの視線を感じたような気がしたのだ。
俺はじっと手を見た。石鹸を擦ってできた白い泡の塊がカニのあぶくのようにじわじわと音を立てて消滅してゆく。蛇口の取っ手を捻り、水を出す。泡のぬるぬるは消滅し、汚れも一緒に流される。その刹那……。
ふと、背後に気配を感じた。
直感の赴くまま、頭を上げて正面の鏡を見る。そこに映っていたのは俺と、そしても一人――。
「だれだ、あんた……！！」
振り向きざまに、俺は少々情けない音色の声を発した。
そこに立っていたのは退職間近と思われるくらい年齢の行った男だった。使い込まれたスーツを着込み、奇妙な笑みを浮かべている。
なぜ奇妙なのか。
原因は眼光だ。
学生が身近で見る大人？教師？とはまったく違う。注意深く、それでいて余裕がある。あらゆるものを観察し、分析し、記憶することに長けていそうな目元。軍人であれば叩き上げの下士官だろう。公務員であれば……。
「あんた、刑事さんか」
「見事な洞見ですねぇ。しかし、ちょっと惜しい」
男は悠々として口元を綻ばせた。それは牙を見せる吸血鬼のように犬歯を覗かせたもので、安心感より威圧感の方が強く感じられるほどだ。
「私は結ノ浜警察署の署長をやっているおおひらちょうじ大平諜司と申します。階級は警視。まぁ気持ちの上ではまだ巡査長くらいのつもりですがね」

男は警察手帳をちらりと見せ、すぐに閉じた。馴れた手つきである。
「署長がくるなんて意外でしょう？　しかし結ノ浜は長崎でも珍しく合併を拒否した町なので、署の規模が小さいから私みたいに容儀が軽い人間でもホイホイ出歩いて行けるんですよねぇ」
「それで、署長さんがなんの御用でしょうか？」
「またまたぁ、既にご存じのはずですよ。前田郁佳さん？」
「なんのことかわかりませんね」
「生徒会長さんから聞いていませんか？　警察がこの学校に来るって」
「そのことなら聞いていますが……、あなたが会長と会う予定の？」
「それはまた別の部下の仕事です。私はその部下の仕事に関連した用事がありましてね」
この大平とかいう男、言っていることがどうもハッキリしない。まるで俺に自ら何かを喋らせようとしているかのようだ。
警戒しておかないと足元を掬われかねんな……。
「まぁまぁ、そう睨まなくてもいいですよ。用自体はすぐに済む内容ですから」
そういうと、所長はポケットに手をつっこみ、透明の小さなビニール袋を取り出した。
「これがなんだかわかりますか？」
「なんですか、これ」
それは綺麗な小石だった。一歩間違えば砂になりかねないくらい小さい石が、幾つか詰まっている。色は赤や黒や緑といった多様さで、普段の生活では見ることなどない珍しいものだっった。
「こくしょくじゃもんがん黒色蛇紋岩、りょくしょくへんがん緑色片岩、せきしょくへんがん赤色片岩、せいしょくへんがん青色片岩、かざんかくれきがん火山角礫岩……。これらの石は大昔に噴火した火山が堆積した地層から取れるもので、普通なら相当深くまで地面を掘らないと入手できません。しかしこの結ノ浜町では一箇所だけ、

これを簡単に入手できる場所があるんですよ」
「なにがいいたいんです？　俺には関係ないでしょう。帰りますよ」
「まぁ話は最後まで聞いていただきたいんですがね」
逃げようとした俺の肩を、署長の腕ががっしりと掴む。肩を掴まれただけなのに、まったく動けない……。この男、やはり熟練している。並の警官ではない。
「地層を露出させるには土を削らなくちゃいけない。これを自然の力でやろうと思ったら、必要になるのは長い年月と真横から吹きつける風です。世界を見ればそこかしこに風で岩が削られた地域を見つけることができますが、日本の山は樹木が生い茂っているためまずそうはなりません。しかし一つだけ例外があります。――海岸ですよ」
「海岸……」
「つまりは崖です。海に面した崖は削られてできる。結ノ浜には景勝地として名高い霞ヶ原があるじゃないですか。あそこの崖下では、これらの石が簡単に手に入るのです」
「それで、その石と俺に何の関係が？」
「じつをいうと、授業中、結ノ浜署の捜査員を動員して三年生の運動靴を調べさせていただきました。霞ヶ原で起きた事件にこの学校指定の運動靴が使用されていたからです。そしてすべての靴を調べた結果、前田さん。貴方の運動靴の裏から、この石が見つかったんです。しかも見てください。非常に綺麗でしょう？　汚れていない。これはつまり、比較的最近になってこの石が靴裏にはまり込んだということを意味しています。一度でも校庭で運動靴を履けばすぐに泥だらけになりますからね。さて、前田さん。あなたは事件が起きた当日、この靴を履いていましたね？」
ヤバい。
落ち着け、俺。
こいつは俺を逮捕しに来たのか？　違うだろ。逮捕できるならとっくにやっているはずだ。今のところ状況証拠だけ。だったらシラ

を切るのが一番だ。
「さ、さぁ……。記憶にありませんね」
「本当に、忘れてしまったんですか？」
「だから覚えてないって言ってるでしょう！」
俺は表面上怒りを露わにしながら、必死に取り繕う方法を探していた。何かないか。上手い言い訳が。
――――くそっ、何も思い浮かばない。
心臓がバクンバクン唸っているのがわかる。脈は不正常、脳内もめちゃくちゃ。ダメだ、いまは思考するなんてできそうにない。
大平署長が俺の肩から手を離した。
「それにしてはおかしいですねぇ。結ノ浜の事件は先々週の出来事です。学校が始まったのが今週から。長期休みの場合、運動靴は持ち帰って洗うのがこの学校の決まりと聞いています。今週はまだ体育の授業はなかったはずですね？　そのお陰か、大半の生徒の運動靴が比較的綺麗な状態で、冬休みに使用された形跡はない。しかし前田さんの靴は使われた形跡があり、加えていま見せた火山性の小石が発見された。先週とは言いませんが、冬休み中のいつか、必ず霞ヶ原公園へ出かけているはずなんですよ。証拠がそう語っています」
「……」
「今度はだんまりですか？」
「……」
「なんとか言ったらどうなんです？」
「……」
「ハァ……」
署長は残念そうに嘆息しながら、下あごと喉の境界あたりにある軟らかい部分を撫でた。？ポリポリ？というよりは？プニプニ？という効果音の方が似合いそうな雰囲気だ。
「今回はただの顔合わせです。また来ますよ、前田郁佳さん。警察が貴方を見ているということ、くれぐれも忘れないでくださいね」

大平署長は去って行った。足音がゆっくりと遠のいてゆく……。
数秒後、署長の気配が完全に消えてから、俺はやっと肩から力を抜くことができた。
大きく息を吐く。
「なんだ、あいつ。何なんだ」
落ち着け。ゆっくり呼吸しろ。混乱を整理するんだ。
いま警察に握られているのは状況証拠だけだ。物的証拠も決定性を欠く。それなのにわざわざ署長がやってきて俺に脅しをかけやがった。なぜ？　答えは分かりきっている。俺を掣肘するためだ。
そう。これ以上被害者を増やさないため。そして俺を慌てさせて尻尾を掴むため。わざわざトイレに押し入ってきたのも、狭さによって生じる圧迫感を利用しようとの意図からだろう。
あの署長は頭がキレる。そして本気で俺をつぶしにきている。
俺は無能じゃない。事実致命的なミスは犯さなかった。今回のはちょっと油断しただけ。これから注意すれば問題ない。
知力を利用しろ。絞れるだけ絞るんだ。
絞って――――絞って絞って絞って――――――――――――――――――その一瞬、俺の頭に一つの答えが浮かんだ。
『やめる』
ここでやめる。
殺しをやめてしまうんだ。証拠はまだ見つかっていない。だから俺が逮捕されるなんてこともない。いまやめてしまえば俺の人生は取り返しがつく。
取り返しが――――――――――――あれ？
……
……
……
……おかしい。
違う。
これは違う。

俺は非日常を求めていたんじゃなかったのか？
一生続く予定通りの人生から離れることを望んでいたんじゃなかったのか？
周囲を、社会を変革する悦びを希求していたんじゃないのか？
それがなんだ。警察が犯行を嗅ぎつけてきただけでやめるだって？
バカだろそりゃ。せっかくこんなにも面白い遊びを見つけたのに、やめちまうのか？
ここで？
また心臓の音が大きくなった。首筋の血管が脈打ち、皮膚の内側から神経を叩いている。
今度の鼓動は緊張じゃあない。もっと別のもの。
これは……そう、興奮だ。
期待しているんだ。体がこれからの未来を本能的に感じ取り、反応を示している。
いま、死に神が鎌首を擡げ俺の背後に立っている。だがその鎌は俺の行動次第で避けられるし別の者に向けさせることもできる。
やるんだ。俺が。
俺が警察を欺いてやる。ヤツらの眼前で他人をぶっ殺してやる。度肝を抜くような一発をぶちかましてやる。
あぁ……ちくしょう。また楽しくなってきやがった。人殺しのことを考えると、どうしてこう熱中しちまうんだ？　考えれば考えるほど、実行の妄想をすればするほど、面白いって感情が自然と湧き出てしまう。
もうとまらない。とめられない。
これは俺の意志じゃないんだ。本能なんだ。自然体なんだ。だからとまらない。
殺そう。警察の前でぶち殺そう。生徒の前で、人々の見ているその眼前で、殺人犯がここにいることを教えてやろう。そして何より、証拠を残さず警察を欺いてやりたい。あの傲慢な署長に一泡吹かせてやりたいんだ、俺は！

決めた。もうやめない。ひとごろしはやめない。
殺してやる。ぶっ殺してやる。どいつもこいつもみんなぶち殺してやる。
この決定に何か問題があるとすれば、それは誰を殺るか、どうやって殺るかだが、そんなこと今はどうでもいい。後から考えればいいことだ。
とにもかくにも俺は決めたんだ。だから行動しよう。早速明日から、物色を始めようじゃないか！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6141w/

ひとごろしって、チョーおもしれェ！

2011年12月11日14時48分発行